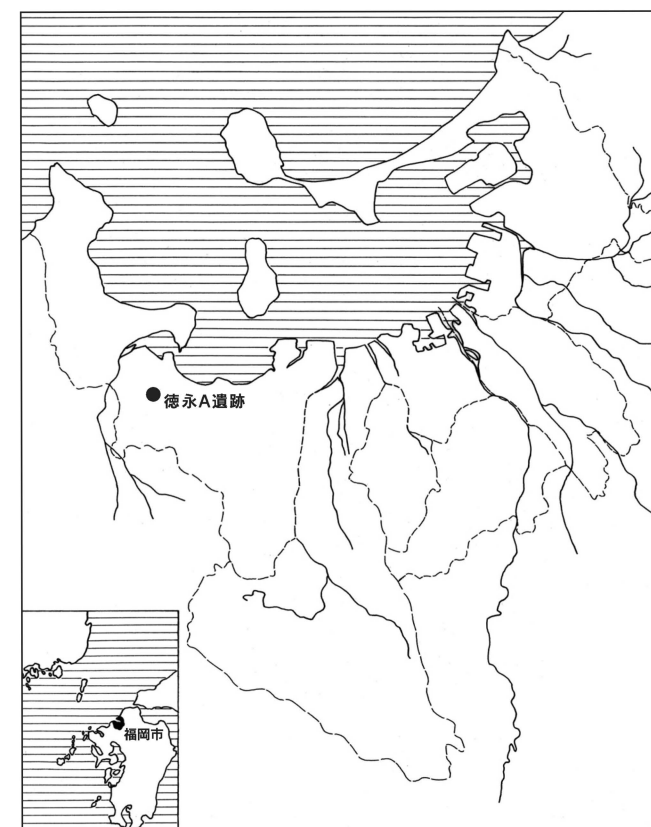


とく なが
徳永 A 遺跡 6

－第5次・7次調査の報告(2)－



遺跡略号 TOA-5 TOA-7
調査番号 0932 1127

2014
福岡市教育委員会



1. 初期須恵器集合



2. 初期須恵器高杯



3. 初期須恵器杯身

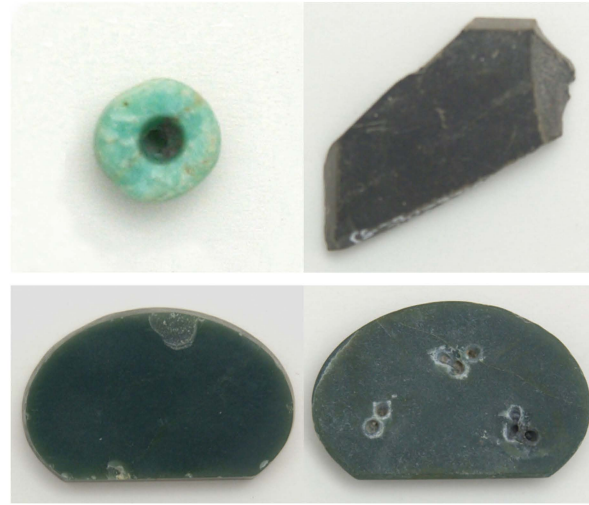


4. 平安時代の陶磁器集合

卷頭図版 2



1. 鉄製U字形鋤先



2. 特殊石製品(天河石製小玉、石製丸鞆、巡方)



3. 韁の羽口集合



4. 怡土城系瓦

序

古くから大陸文化を受け入れる窓口として栄えた福岡市には数多くの文化財が存在しています。それらは本市のみならずわが国のかけがえのない財産ではありますが、開発によりやむを得ず失われる埋蔵文化財については事前に記録保存調査を行い、後世に伝えるようつとめております。

本書は西区の伊都土地区画整理事業に伴い実施した徳永A遺跡第5・7次調査の成果を報告するものです。徳永A遺跡は国道202号線今宿バイパス関係の発掘調査を嚆矢として、古墳時代から中世の集落跡などが発見されていますが、中でも平安時代は大宰府が管轄する主船司に関連する遺跡として注目されてきた遺跡です。

本書で報告する調査では、古墳時代後期から中世の集落関連遺構や水田関連遺構のほか、平安時代の鍛冶炉や火葬墓といった特異な遺構もみつかっています。また、初期須恵器や陶質土器、石製丸靱や多数の怡土城系瓦の出土など、遺跡の性格を考えるうえで、非常に重要な成果をあげることができました。

本書が埋蔵文化財保護に対する理解と認識を深める一助となるとともに、学術研究の資料として活用いただけることを心より願っております。

最後になりましたが、発掘調査から報告書作成に至るまでご協力いただいた関係者の方々に厚くお礼申し上げます。

平成26年3月24日

福岡市教育委員会
教育長 酒井龍彦

例 言

1. 本書は福岡市教育委員会が伊都土地区画整理事業に伴い行った徳永A遺跡第5次・7次調査の発掘調査報告のうち出土遺物についての報告である。遺構については『徳永A遺跡5』（福岡市埋蔵文化財調査報告書第1189集、2013年）で報告を行っている。
2. 徳永A遺跡第5次・7次の調査と整理は森本幹彦が担当した。実測・撮影等の作業を行った者は以下の通りである。
室内整理作業：篠田千恵子、下山慎子、田中ヤス子、八木一成（整理補助員）
遺物の実測・製図：5次の縄文土器、5・7次の旧石器～弥生時代石器は板倉有太（文化財保護課）が整理・報告を行った（第II章7）。5・7次の土器・土製品・石製品等は主に熊埜御堂和香子（技能員）が実測・製図を行い、その補足や金属製品等は森本が行った。
遺物の撮影：5・7次古墳時代～中世の遺物：森本 5・7次の旧石器～弥生時代石器：板倉
金属器の保存処理、玉類・石器の材質分析：上角智希（埋蔵文化財センター）、西澤千絵里（元・埋蔵文化財センター）
3. 本書の記述は次の通り。**II章7**：板倉、**IV章**：大澤正己(所属は下記)、**その他と編集**：森本
4. 整理報告の過程で、本市職員の他、次の方々から指導及び援助を得た。記して感謝いたします（敬称略）。
岡野裕俊(伊都国歴史資料館)、大澤正己(日鉄住金テクノロジー株式会社 八幡事業所TACセンター)、森将志（パレオ・ラボ）、柳本照男（大韓民国・東洋大学）
5. 本報告の出土資料および記録類は平成26年度に埋蔵文化財センターで収蔵保管する予定である。

徳永A遺跡 第5次調査		遺跡調査番号	0932
地番	福岡市西区徳永字松尾700-5 他	遺跡略号	TOA-5
分布地図番号	120 周船寺	調査面積	4700㎡
調査期間	2010（平成22）年1月4日～2011（平成23）年3月24日		

徳永A遺跡 第7次調査		遺跡調査番号	1127
地番	福岡市西区徳永字松尾681-1 他	遺跡略号	TOA-7
分布地図番号	120 周船寺	調査面積	657㎡
調査期間	2011（平成23）年9月20日～2011（平成23）年11月21日		

本文目次

I. はじめに	
1. 調査に至る経緯	1
2. 調査の組織	1
II. 第5次調査出土遺物の報告	
1. 土器・陶磁器	2
2. 瓦	38
3. 土製品	38
4. 鍛冶関連遺物	44
5. 金属（鉄・青銅・鉛）製品	45
6. 石製品（古墳時代以降）	52
7. 縄文土器および第5・7次調査出土の旧石器～弥生時代石器	53
III. 第7次調査出土遺物の報告	
1. 土器・陶磁器	59
2. 瓦	72
3. 土製品	74
4. 石製品	74
5. 鉄製品	74
IV. 徳永A遺跡第5次調査出土製鉄・鍛冶関連遺物の分析調査	81
V. まとめ	99

挿表目次

Tab.1 旧石器～弥生時代石器の器種組成	53
Tab.2 旧石器～弥生時代石器計測表	56

挿図目次

Fig. 1	土器・陶磁器実測図 (SK25 出土 1/3) ……………	5
Fig. 2	土器実測図 (SK25、26、33 出土 1/3) ……………	6
Fig. 3	土器実測図 (ST302、SK452、掘立柱建物、鍛冶関連遺構等出土 1/3) ……………	7
Fig. 4	土器実測図 (SX12 出土 1/3) ……………	8
Fig. 5	土器実測図 (SX14 等出土 1/3) ……………	9
Fig. 6	陶磁器実測図 (包含層出土① 1/3) ……………	10
Fig. 7	陶磁器・土器実測図 (包含層出土② 1/3) ……………	11
Fig. 8	土器実測図 (包含層出土③ 1/3) ……………	12
Fig. 9	土器実測図 (SH401、SI1 等出土 1/3) ……………	15
Fig. 10	土器実測図 (SD353、ST421 等出土 1/3) ……………	16
Fig. 11	土器実測図 (SX541 等出土 1/3) ……………	17
Fig. 12	土器実測図 (SX541、SK5124 等出土 1/3) ……………	18
Fig. 13	土器実測図 (SK5124、SD5150、SB11 等出土 1/3) ……………	19
Fig. 14	土器実測図 (SI2 等出土 1/3) ……………	20
Fig. 15	土器実測図 (ST609、SP720 出土 1/3) ……………	21
Fig. 16	土器実測図 (SK624・625、SL682、SK683、686 等出土 1/3) ……………	22
Fig. 17	土器実測図 (SL682 等出土須恵器大甕 1/3) ……………	23
Fig. 18	土器実測図 (SK624・625、SD1000 出土 1/3) ……………	24
Fig. 19	土器実測図 (SK674、SD1000 出土 1/3) ……………	25
Fig. 20	土器実測図 (SD1000、1002、SP1003 等出土 1/3、1/6) ……………	26
Fig. 21	土器実測図 (包含層出土④ 1/3) ……………	29
Fig. 22	土器実測図 (包含層出土⑤ 1/3) ……………	30
Fig. 23	土器実測図 (包含層出土⑥ 1/3) ……………	31
Fig. 24	土器実測図 (包含層出土⑦ 1/3) ……………	32
Fig. 25	土器実測図 (包含層出土⑧ 1/3) ……………	33
Fig. 26	土器実測図 (包含層出土⑨ 1/3) ……………	34
Fig. 27	土器実測図 (包含層出土⑩ 1/3) ……………	35
Fig. 28	土器実測図 (包含層出土⑪ 1/3) ……………	36
Fig. 29	土器実測図 (包含層出土⑫ 1/3) ……………	37
Fig. 30	初期須恵器、古墳時代中期土師器、埴輪、弥生土器実測図 (包含層出土⑬ 1/3) ……………	37

Fig. 31	瓦実測図 1 (1/4) ……………	39
Fig. 32	瓦実測図 2 (1/4) ……………	40
Fig. 33	怡土城系瓦実測図 1 (1/4) ……………	41
Fig. 34	怡土城系瓦実測図 2 (1/4) ……………	42
Fig. 35	土錘実測図 (1/2) ……………	43
Fig. 36	鉄滓実測図 (1/4) ……………	45
Fig. 37	鞆の羽口、炉壁実測図 (1/3、1/2) ……………	46
Fig. 38	金属製品 (鉄器、鉛錘、青銅製金具) 実測図 (1/2) ……………	47
Fig. 39	石製品 (銚帯具、紡錘車) 実測図 (1/1) ……………	48
Fig. 40	石製品 (鍋、錘、玉、砥石) 実測図 (1/1、1/2) ……………	49
Fig. 41	石製品 (砥石) 実測図 (1/2) ……………	50
Fig. 42	石製品 (砥石) 実測図 (1/2) ……………	51
Fig. 43	縄文土器実測図 (1/3) ……………	53
Fig. 44	剥片石器実測図 (1/1、1/2) ……………	54
Fig. 45	礫石器実測図 (1/3) ……………	55
Fig. 46	土器実測図 (SX002、SI5 出土 1/3) ……………	60
Fig. 47	土器実測図 (SI5 出土 1/3) ……………	61
Fig. 48	土器実測図 (SI5、7 出土 1/3) ……………	62
Fig. 49	土器実測図 (SI5、6、8 出土 1/3) ……………	63
Fig. 50	土器実測図 (SH019、SK025 等出土 1/3) ……………	64
Fig. 51	土器実測図 (谷上層等出土① 1/3) ……………	65
Fig. 52	陶磁器・土器実測図 (谷上層等出土② 1/3) ……………	66
Fig. 53	土器実測図 (谷下層等出土① 1/3) ……………	67
Fig. 54	土器実測図 (谷下層等出土② 1/3) ……………	68
Fig. 55	土器実測図 (谷下層等出土③ 1/3) ……………	69
Fig. 56	土器実測図 (谷下層等出土④ 1/3) ……………	70
Fig. 57	砥石、土錘実測図 (1/2) ……………	70
Fig. 58	瓦実測図 (1/4) ……………	72
Fig. 59	土製竈、石鍋、鉄製品、天河石製小玉実測図 (1/1、1/2) ……………	73
Fig. 60	天河石製小玉 (59-8) の蛍光 X 線分析結果 ……………	74

図版目次

巻頭カラー

巻頭図版1

1. 初期須恵器集合
2. 初期須恵器高杯
3. 初期須恵器杯身
4. 平安時代の陶磁器集合

巻頭図版2

1. 鉄製U字形鋤先
2. 特殊石製品
(天河石製小玉、石製丸轆、巡方)
3. 韃の羽口集合
4. 怡土城系瓦

モノクロ写真図版

PL1	土器1	75
PL2	土器2、陶磁器	76
PL3	土器3	77
PL4	土器4	78
PL5	瓦、石製品、金属製品	79
PL6	旧石器～弥生時代石器	80

I.はじめに

1. 調査に至る経緯

本書で報告する徳永A遺跡の発掘調査は伊都土地区画整理事業に伴う造成に先立って実施されたものである。伊都土地区画整理事業は福岡市西部の今宿平野東部を対象に計画された区画整理事業で、施工面積は約130haである。埋蔵文化財の確認された範囲を対象として実施した発掘調査は2002(平成14)年度から2012(平成24)年度におよぶ。事業地内の調査経緯については前編の『徳永A遺跡5』(第1189集)に記しているので省略したい。

徳永A遺跡第5次調査は2010(平成22)年1月4日から2011(平成23)年3月24日まで、第7次調査は2011(平成23)年9月20日から同年11月21日まで発掘調査を行った。整理・報告はいずれも2011(平成23)年度から2013(平成25)年度に行った。

2. 調査の組織

調査委託	福岡市住宅都市局(旧・都市整備局)伊都区画整理事務所		
調査主体	福岡市教育委員会		
	教育長	酒井龍彦(平成22年度～) 山田裕嗣(平成21年度)	

発掘調査時(平成21～23年度)の体制は以下のとおりである。

調査総括	文化財部長	藤尾浩	宮川秋雄(平成21・22年度)
	文化財部埋蔵文化財第2課課長	田中壽夫	
	埋蔵文化財第2課調査第2係長	菅波正人	
	埋蔵文化財第2課調査第1係長	杉山富雄(平成21年度)	
庶務担当	埋蔵文化財第1課 管理係	古賀とも子	
事前協議	埋蔵文化財第1課事前審査係長	宮井善朗	
	事前審査係	今井隆博、阿部泰之(平成21・22年度)	
第5次・7次調査担当	埋蔵文化財第2課 調査第2係	森本幹彦	

文化財部は平成24年4月1日付で教育委員会から経済観光文化局に移管しており、整理・報告の平成24・25年度の体制は以下の通りである。

調査総括	福岡市経済観光文化局		
	文化財部部長	西島裕二(平成25年度)	藤尾浩(平成24年度)
	埋蔵文化財調査課長	宮井善朗	
	埋蔵文化財調査課調査第2係長	榎本義嗣(平成25年度)	菅波正人(平成24年度)
庶務担当	埋蔵文化財審査課 管理係	川村啓子(平成25年度)	古賀とも子(平成24年度)
報告担当	5次・7次: 森本幹彦(埋蔵文化財審査課事前審査係)		

II. 第5次調査出土遺物の報告

前編の「徳永A遺跡5」（福岡市埋蔵文化財調査報告書第1189集、2013年）にて第5次調査の遺構を報告しているが、主な遺構は平安時代～中世の水田関連遺構、平安時代の掘立柱建物、鍛冶炉、土坑、火葬墓、古墳時代後期後半～末（飛鳥時代前半）の竪穴建物、掘立柱建物、土坑、土器棺等である。

出土遺物は上記時期の遺構や包含層に伴うものの他に古墳時代中期前半の土師器や初期須恵器、陶質土器、埴輪、弥生土器、縄文土器、旧石器～弥生土器の石器がある。総量は約200箱である。以下、遺物の種別ごとに報告していく。各遺物や帰属する遺構の時期等については、第V章のまとめに記す。

1. 土器・陶磁器

①SK025出土土器、陶磁器 (Fig. 1～Fig.2-12)

平安時代の遺構の中では最も遺物がまとまって出土しており、他に後述の瓦等も伴う。

1～4は越州窯系青磁碗である。1は上層出土、輪花の口縁片。釉は剥落している。後述の田中氏の分類に照らせば、胎土にやや灰色粒子を含むのでB類。2は上層出土、やや外反する口縁に輪状高台。釉は剥落している。胎土に砂粒をやや多く含むC-4類。3は上層出土、蛇の目高台で白色耐火粘土の目跡あり。胎土は灰白色・緻密精良で、A-I-1類。4は下層下部出土、輪状高台で、畳付は目跡を掻き取り、高台外側に凹線あり。A-I-4類。5は上層出土の越州窯系青磁壺胴部である。B類胎土。6は上層出土の緑釉陶器杯で、外反気味の口縁を有する。胎土は精良。

7は須恵器瓶である。下層下部出土で、同一個体片がSX14や433等からも出土。有段口縁で、Fig.3-11のような平底とみられる。肥後系か。胴部外面は斜格子目タタキで、肩から上は別作り整形か。8は須恵器長頸壺頸部で、上層出土。外面にカキ目。9・10は須恵器杯である。前者は下層下部、後者は遺構上面出土。後者の底部にはへら切の痕跡が残り、二本平行線のへら記号文がある。11は瓦質焼成の甌底部で、上層出土。

12～16は黒色土器A類（内面黒化处理）碗である。12は上層出土で、越州窯系青磁碗を模倣した器形とみられる。13は下層下部出土、底部に板状圧痕あり。14は下層出土で、他より器壁厚いので、やや大きい法量の碗か。底部へら切。15は西壁付近上層出土、底部へら切。16は上層出土、底部へら切。

17は内外面の一部が黒化しているが、黒色土器のような意図的な黒化处理ではないとみられる。上層出土。

18は黒色土器B類杯。遺構上面出土。高台は断面三角形の短小なもので、器壁が非常に薄い。畿内系とみられる。19は黒色土器A類の鉢で、口縁がすばまって外反する。上層出土。黒化は外面の口縁直下に及ぶ。

20～24は土師器の高台付碗である。20は上層出土。内外面の一部が黒化しているが、黒色土器のような意図的な黒化处理ではない。底部はへら切。21は下層出土。底部はへら切で板状圧痕がある。22は上・下層出土。底部が平坦であり、21等と同様の調整であろう。23は下層下部出土で、底部はへら切である。24は上層出土、身が浅く、高台が低い。

25・26は土師器杯である。25は下層出土、26は上層出土で底部へら切。

Fig.2-1・2は下層出土の土師器碗。3は遺構上面出土の黒色土器A類碗で、底部へら切。4は下層下部出土の土師器杯で、底部へら切。5は遺構上面出土の土師器皿で底部へら切。

6・7・9は土師器中型甕、11・12は小型甕である。8は甌で10は鉢底部か。

②その他平安時代の土坑、溝、掘立柱建物等出土土器 (Fig.2-13～Fig.3-10、3-15～18)

13～16はSK026出土。13・14は黒色土器A類碗で、14は底部に板状圧痕あり。15は土師器碗。16は土師器甕。

17～21はSK033出土。17は須恵器杯。18は土師器杯、19は土師器碗、20・21は土師器甕である。Fig.3-1はSD429出土の黒色土器A類碗である。

2～6はSK452出土。2は上層出土の黒色土器A類碗。3は底面直上出土の土師器碗で底部はへら切。4・5は最下層出土の碗で底部はへら切。6は土師器の鉢である。

7～9はSX016出土。7は黒色土器A類碗。8は須恵器の高台付杯で、畳付にハケメ状の調整痕がある。9は土師器の杯である。

10はSX017出土の土師器杯で底部に板目状圧痕がある。

15はSP312出土の土師器高台付皿、16はSP315 (SB16) 出土の土師器碗、17はSP322出土の黒色土器A類碗、18はSP587出土の黒色土器A類碗である。

③ST302 (火葬墓) 出土土器(Fig.3-11～14)

11はとりあげ番号①の須恵器瓶である。有段口縁、平底。肥後系か。胴部外面は斜格子目タタキで、底部付近は横ケズリ。肩から上は別作り成形とみられる。12は須恵器壺頸部片である。13はとりあげ番号③の土師器杯、14はとりあげ番号②の土師器杯である。

④鍛冶関連遺構出土土器(Fig.3-19～28)

19、20はSL505周辺の遺構面出土の須恵器で、前者は蓋、後者は壺である。21はSK593出土の須恵器高台付杯。22～24はSK591出土。22は黒色土器A類碗、23は土師器碗、24は須恵器蓋である。25～28はSL5118周辺の遺構面出土須恵器。25・26は蓋、27は高台付杯、28は壺で、頸部外面に山形のへら記号文がある。

⑤SX012 (土器溜) 出土土器 (Fig.4)

1～6は黒色土器A類碗で、4・5は底部へら切が確認できる。7は黒色土器A類の鉢である。丸底で、黒頸部が外反する。8・10は内底面が黒化しており、黒色土器A類碗である可能性がある。9・11～13は土師器碗で、9・11は底部へら切、12は底部板状圧痕が確認できる。14～21は土師器杯で、14・15・17・18・19は底部へら切、16・18・27は底部板状圧痕が確認できる。22・23は土師器皿で、底部へら切である。24は器壁の厚い小型甕形の製塩土器である。外面は横位平行タタキ。25・26は土師器甕である。とりあげ番号は1が①、5が⑩、7が③、8が⑧、2・3・6・19・21・25が⑧周辺、9が⑫下、10が④、11が⑦、13が⑬、14が⑭上、15が⑫上、16が⑫下、17が③、18が⑰、20が⑥、24が⑪、26が⑨北である。

⑥SX014 (畔状盛土) 周辺出土土器(Fig.5)

1～4・8・9は黒色土器A類碗。1は底部板状圧痕、2は底部へら切、3・4は底部へら切で板状圧痕が確認できる。5～7は土師器碗で、7は底部へら切。10～12は土師器杯で底部へら切である。13は須恵器杯である。14は土師器耳皿で、底部へら切である。15～18は土師器甕である。19は手捏土器鉢である。20は須恵器蓋である。21は須恵器甕である。22は瓦質土器の甌である。とりあげ番号は2がR6、3がR20、4がR4、5がR31 (SX017上面)、6がR12、8がR29、9がR25(SK026上面)、10がR16、11がR10、12がR9、16がR5、21がR32 (SX017上面)、22がR30である。

⑦包含層等出土の陶磁器・土器(主に平安時代 Fig.6～8)

Fig.6の1～3は龍泉窯青磁碗で、時期は12世紀前後である。1は輪花の口縁で内面に飛雲文が施される。博多遺跡群の貿易陶磁器分類に照らせば、I-6・7類。II-3区I層出土。2は内面に草花文が施されるI類。I-4区I層出土。3は高台部付近でV区北東遺構面出土。

4~26は越州窯系青磁である。4が合子の蓋、5・6が皿で、他は碗で、底部に白色耐火粘土の目跡を残すものが多い。田中氏の分類に照らせば、4はA-I類。I-3区東部Ⅲ層出土。5、6はA-I類で、5がSP316、6がV区中央出土。7はB類。V-6区谷下層上位出土。8はC-II類で、II-3区I層出土。9はA-I-1a類(蛇の目高台)の浅い碗で、SX012出土。10は口縁が外折するB類で、IV-3区I層出土。11は口縁が外反するB類でII-2区I層出土。12は口縁が内湾するB類で、II-3区I層出土。13はA-I-1a類でSX540上面とV-6区南谷上層出土。14はA-I-4類(輪状高台)でII-3区I層出土。15はやや大型の碗で、外底内側はヘラケズリにより、上げ底気味になる。B-I-3類。IV-2区I層出土。16は目跡が外面側部にある。A-II-1類で、IV-2区I層出土。17はA-I-1類で、I-2区Ⅲ層出土。18はA-I-4類で、I~II区南壁西部Ⅲ層出土。19はB-II-3類(平底)であるが、胎土はC類に近い。II-3区R3(SX14東)出土。20はB-I-2類で、II-2区Ⅲ層出土。21はB-II-3類で、V区中央包含層出土。22はB-I-2類で、IV-2区I層出土。23はA-I-1類で、Ⅲ区出土。24はB-I-1類で、V区谷下層上位出土。25はB-II-3類出土であるが、胎土はC類に近い。II-2区北部I層出土。

26は釉が剥落している。細い高台で、見込にヘラ調整と文様の施されたA-I-6類。SX012南西の出土。

Fig.7の1~9は白磁である。1は精製の白磁皿I類で小さい玉縁状の口縁を有する。IV-3区I層出土。2は色調がやや暗いが白磁碗I類で小さい玉縁状の口縁を有する。VI区北I面遺構面出土。3は白磁IV類碗で、I-3区西部I層出土。4・5は白磁II~Ⅲ類碗で、前者はII-3区西部I層出土、後者はI-3区西部I層出土である。6は直口縁の白磁でⅧ類碗か。I-5区南I層出土。7・8は白磁小型碗IX類(口禿)である。前者はI-4区西部I層、後者はII-2区I層出土。9は白磁碗底部で、I-1類の蛇ノ目高台とみられる。V-7区谷下層上位出土。

古代とみられるのは、I類の1、2、9で、他は中世とみられる。白磁II・Ⅲ・IV・Ⅷ類は12世紀以降、IX類は13世紀後半以降のものである。

10~16は国産陶器である。10は灰釉陶器碗である。外反口縁と細い高台で、下半部は回転ケズリ調整である。胎土は須恵質で、釉は淡緑灰色。IV-3区I層出土。11~16は緑釉陶器碗である。16は小型碗で底面は回転糸切である。11・15・16はII-4区南西I層、12はSX012-⑦、13はVI区北東I層、14はSX012 西出土である。13・15・16の胎土は須恵質、他はやや軟質の精良な胎土である。

17・18は黒色土器A類碗で、後者は底部ヘラ切で板状圧痕が残る。19・20は土師器碗、21~26は土師器杯、27が土師器皿である。いずれも底部ヘラ切である。出土地は17・19・20・24・27がIV-3区I層、18がII-2区Ⅲ層、21・26がIV-3区Ⅲ層、22がI-4区谷下層上位、23がV-7区谷下層上位、25がII-3区Ⅲ層である。28は土師器の大型鉢で、II-4区Ⅲ層出土。29は土師質の移動式竈で、V-7区谷上層出土。

Fig.8は須恵器である。1・2は蓋、3・4は高台付杯、5は杯、6は皿である。7はやや瓦質で甌。8・9は外面格子目タタキで耳を有する瓶。同一個体か。10~17は須恵器の甕、広口壺で古墳時代後期のものを含む。10は頸部外面にカキ目と×印状のヘラ記号がある。古墳後期。11は外面格子目タタキ、内面同心円文当具痕。12は有段口縁直下に櫛描波状文。13は頸部下にカキ目。古墳後期か。15は頸部外面に△状のヘラ記号文があり、頸部下にカキ目。古墳後期か。出土位置は1がVI区北谷中層、2がVI区中央I層、3がI-3区谷下層、4がV-6区谷下層、5がIV-2区I層、6がV区西I層、7がII-4区南西、8・9がI・II-4区南、10がVI区北I層、11がI-1~2区I層、12がII-2区I層、13がVI区谷下層、14がVI区東、15がII-4区南西I層、16・17がIV-2区I層出土。

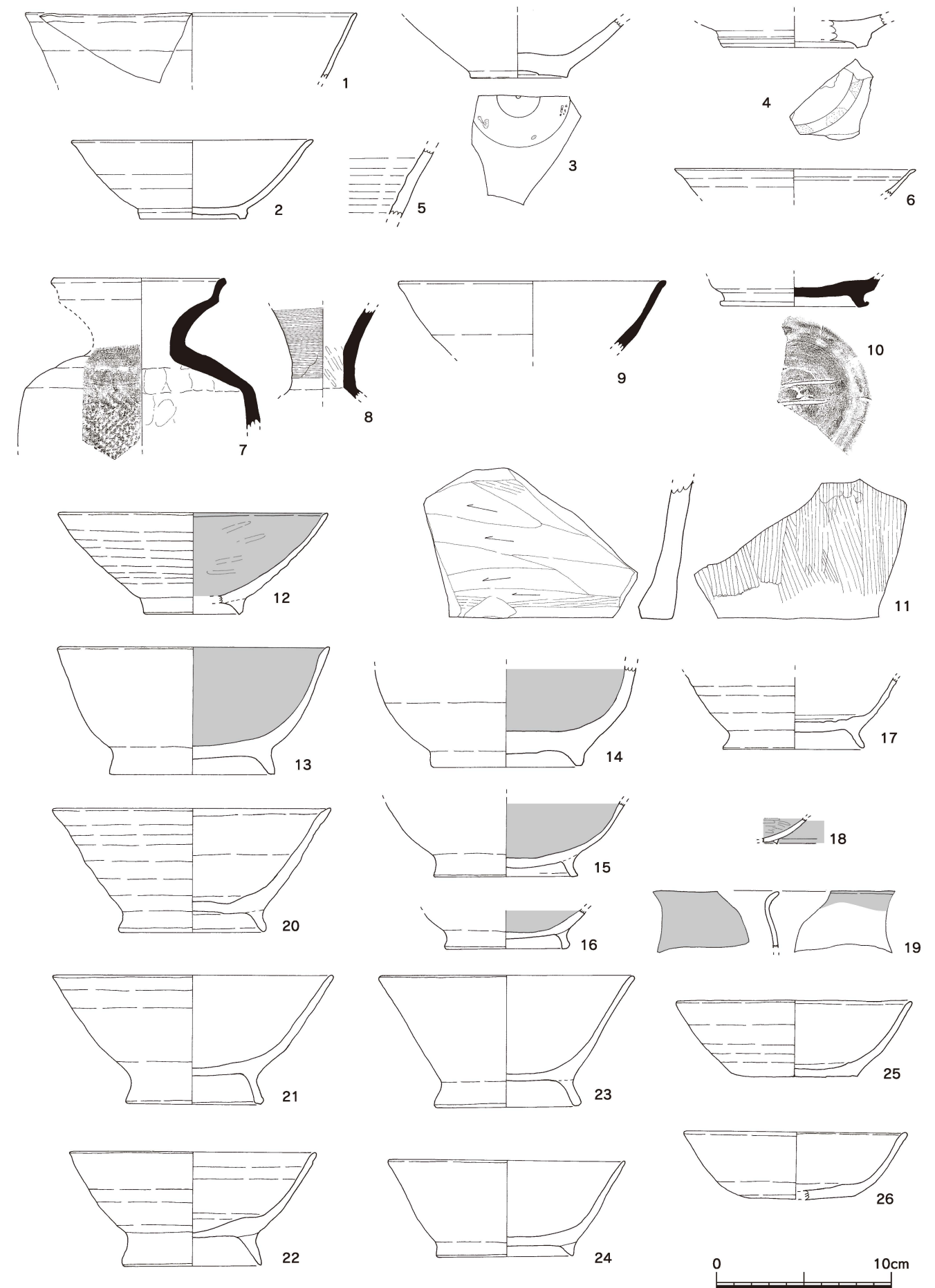


Fig.1 土器・陶磁器実測図 (SK25出土 1/3)

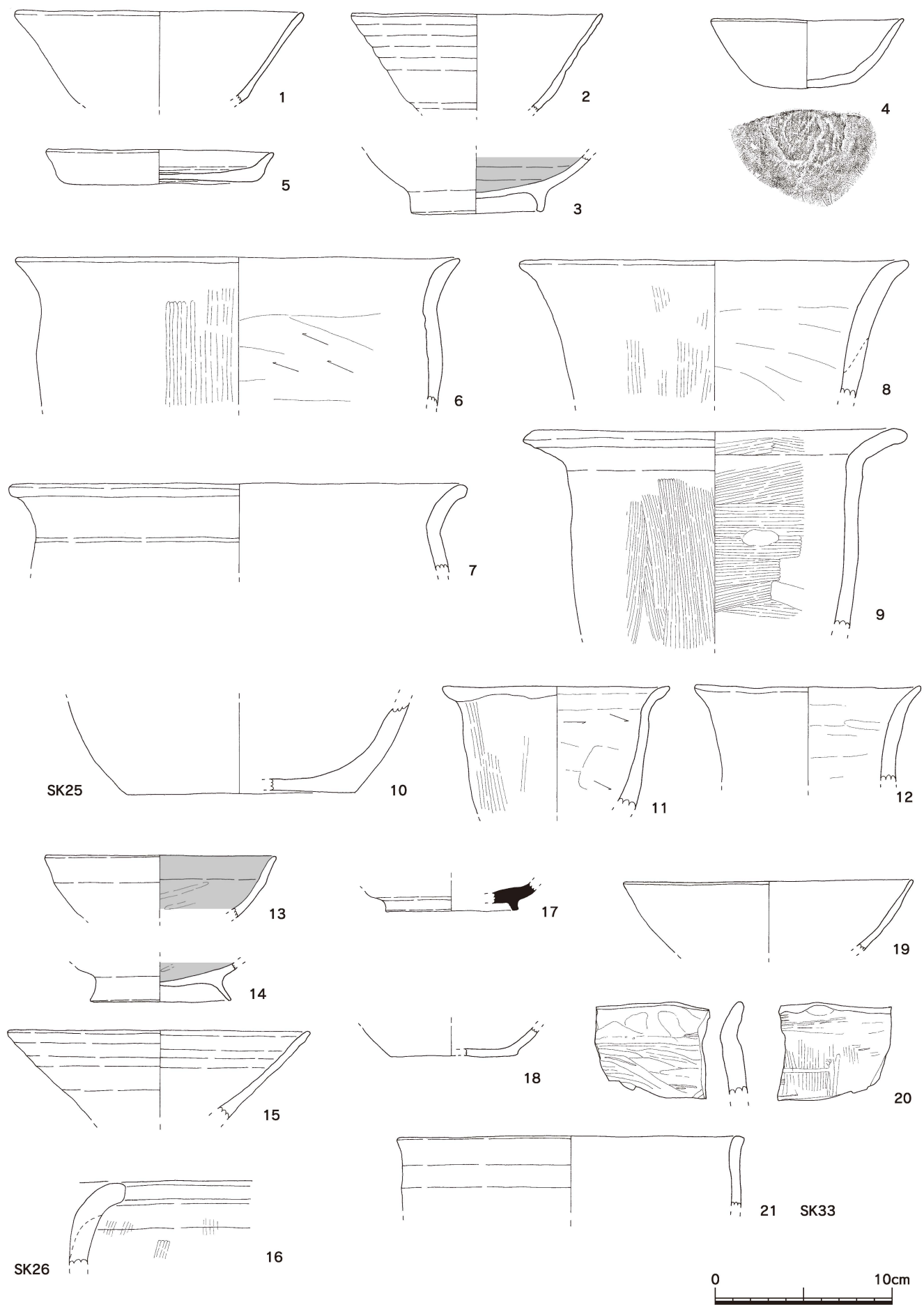


Fig.2 土器実測図 (SK25、26、33出土 1/3)

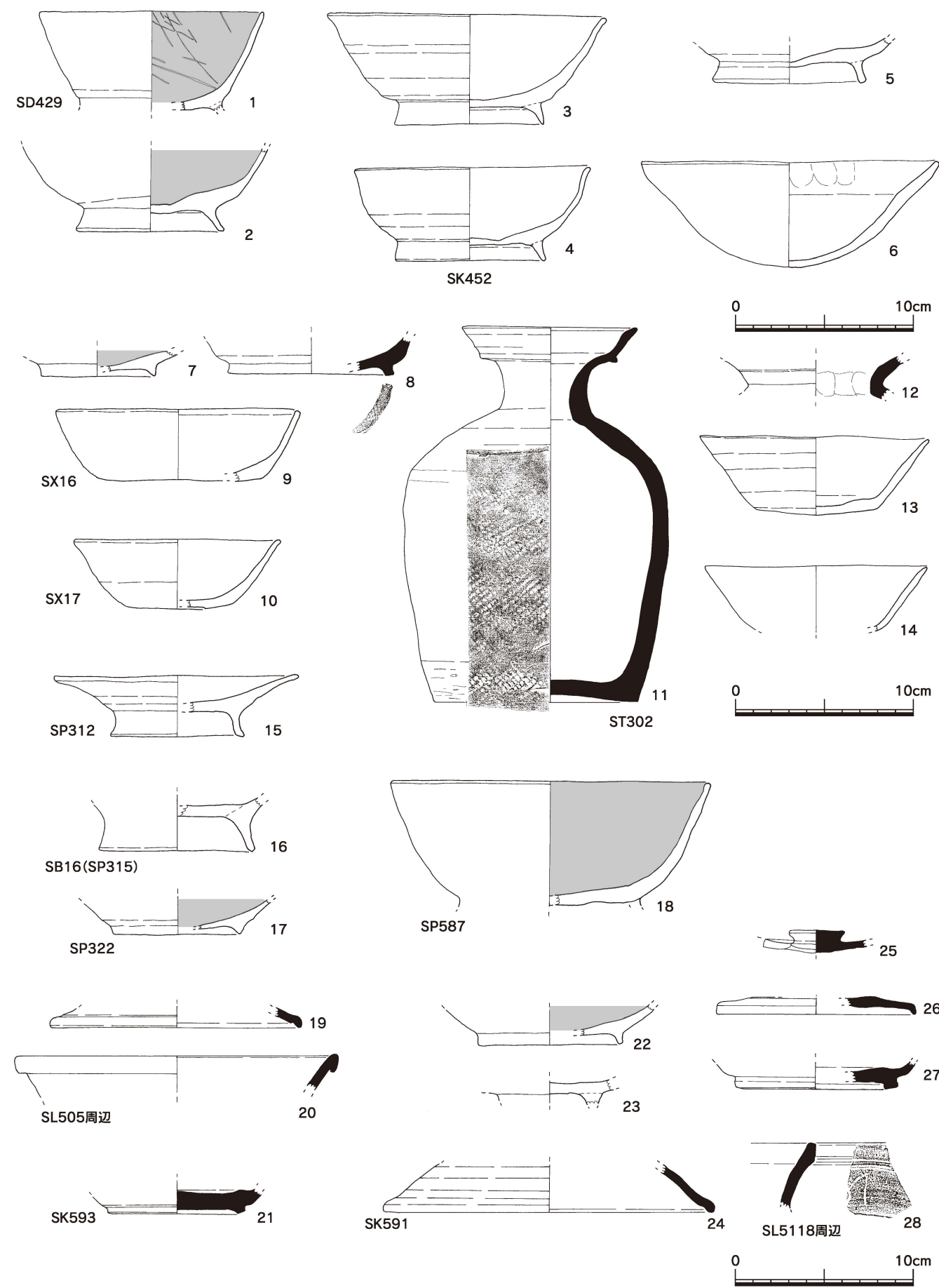


Fig.3 土器実測図 (ST302、SK452、掘立柱建物、鍛冶関連遺構等出土 1/3)

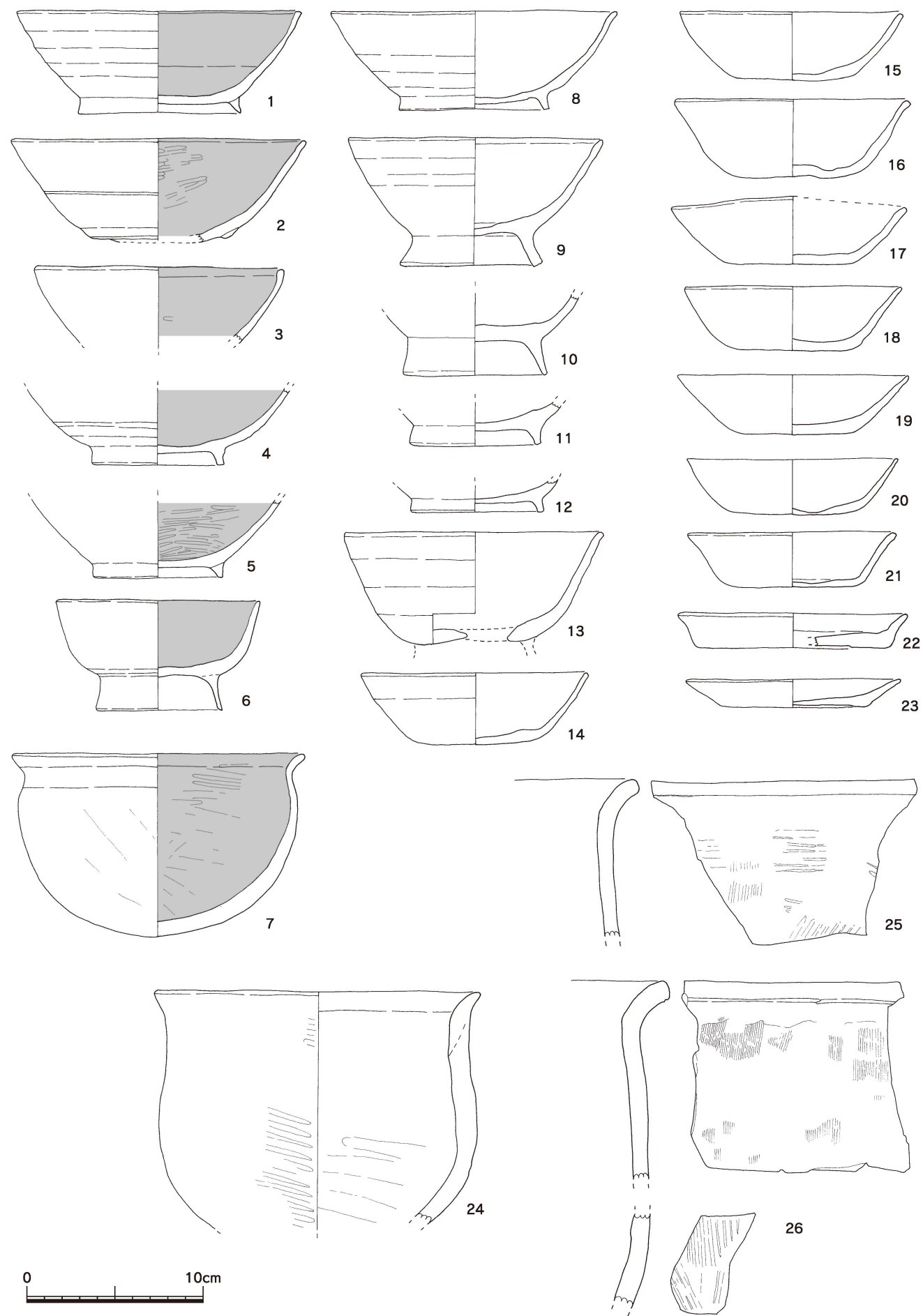


Fig.4 土器実測図 (SX12出土 1/3)

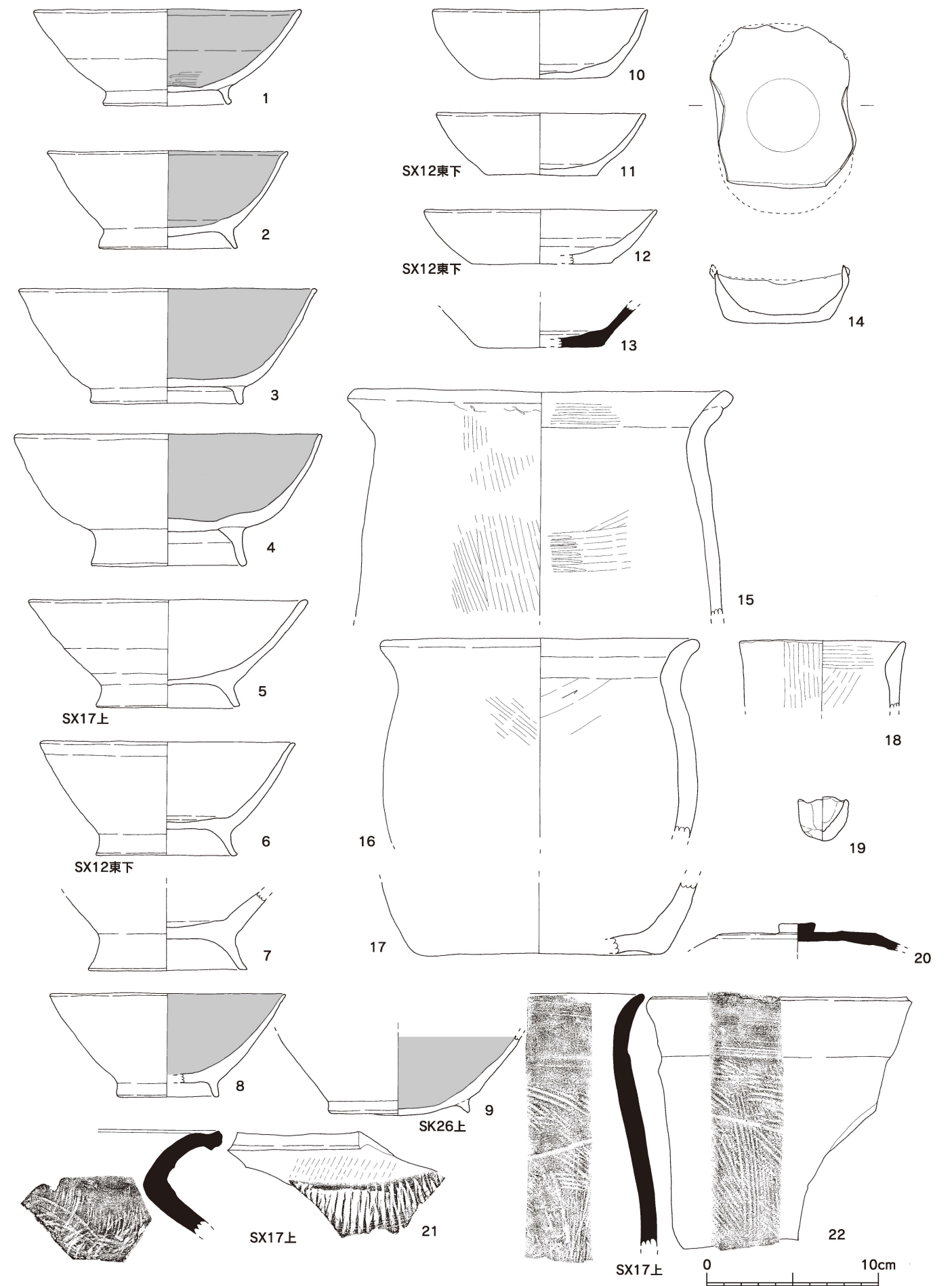


Fig.5 土器実測図 (SX14等出土 1/3)

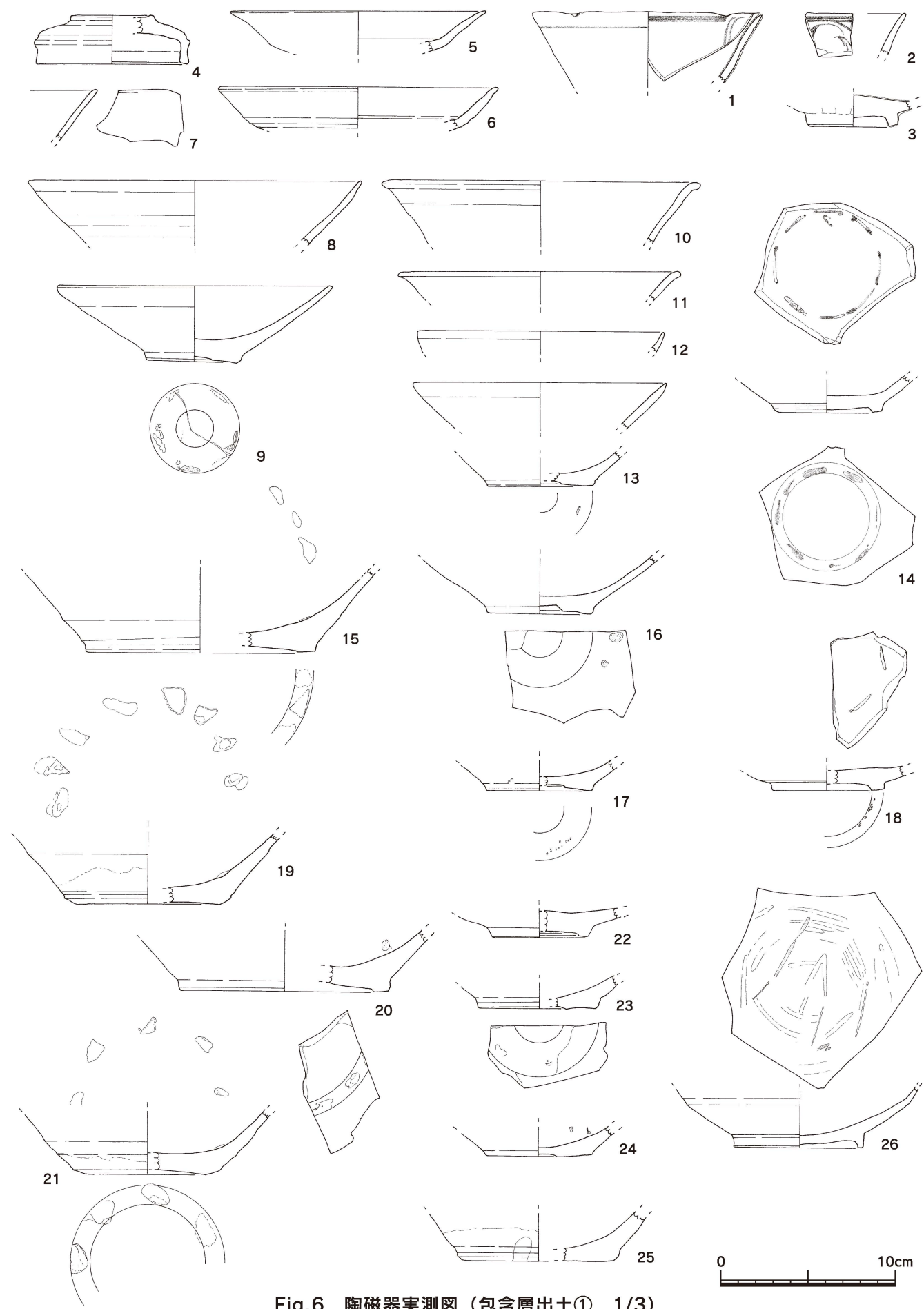


Fig.6 陶磁器実測図 (包含層出土① 1/3)

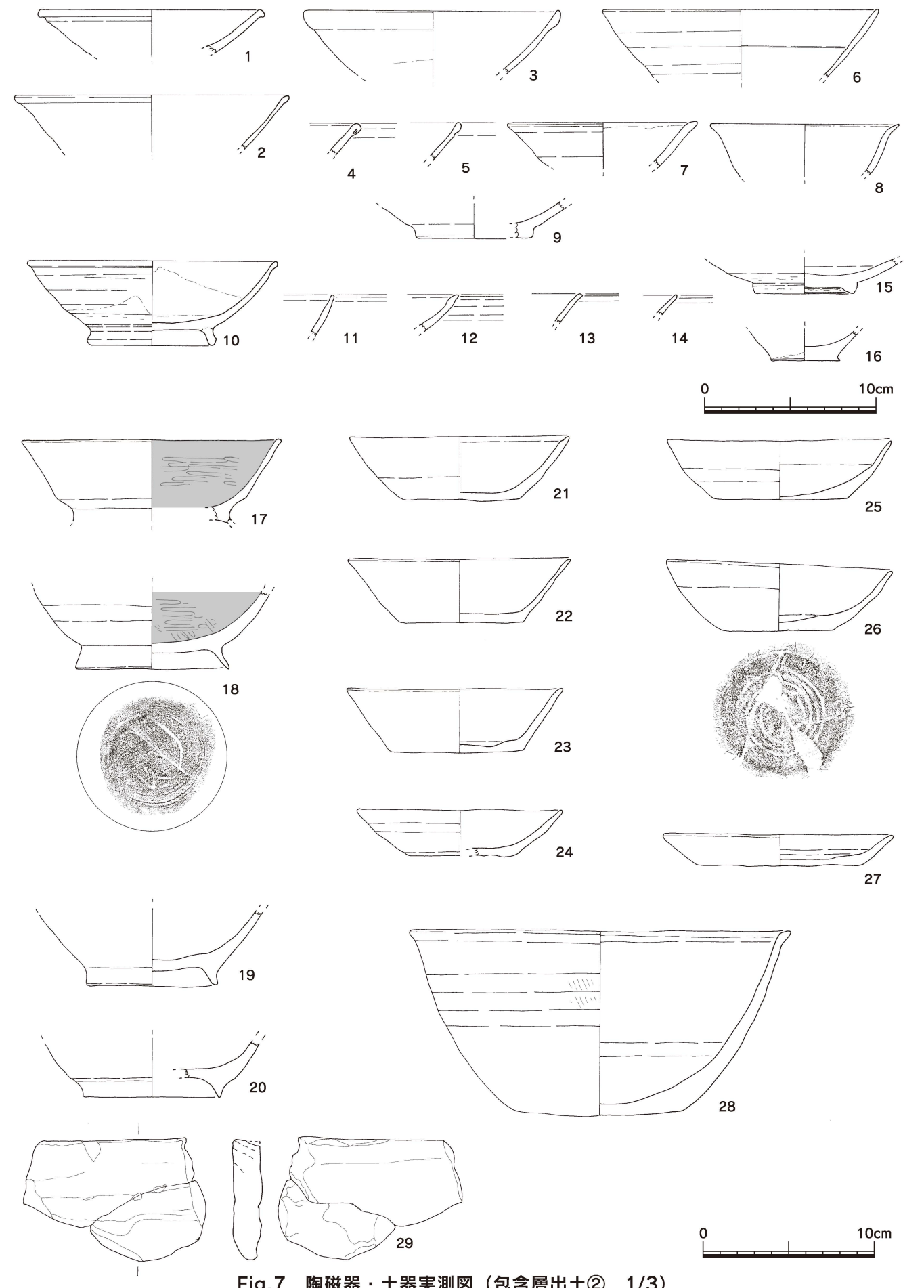


Fig.7 陶磁器・土器実測図 (包含層出土② 1/3)

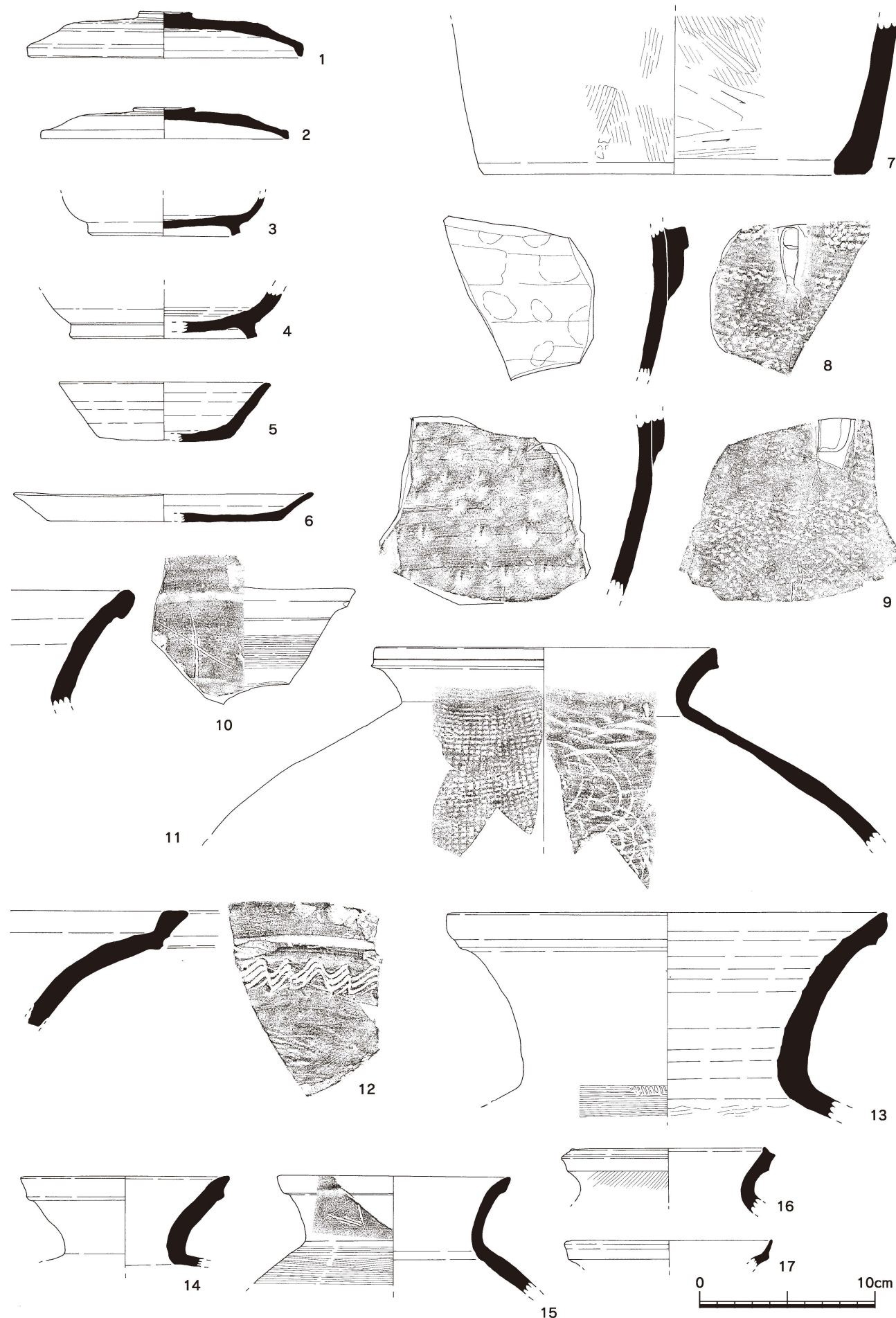


Fig.8 土器実測図(包含層出土③ 1/3)

⑧SH401出土土器 (Fig.9-1~7)

古墳時代末の段造成遺構である。1・2は須恵器壺で胴部外面はカキ目主体の調整。1は抹角平底で細頸、2は広口短頸のタイプである。3は平瓶である。4は須恵器甕口縁小片である。5は須恵器杯身である。内面にヘラ記号文がある。6は土師器高杯脚部。7は須恵器的な調整や形態要素をもつが土師器の焼成である土器で、「赤焼き土器」等と称されるものの一種であるが、本報告では須恵器系土師器との呼称に倣いたい(第V章にて後述)。7は外面平行タタキ、内面も平行文当て具痕がある。口縁端部がやや面取り状をなすが、口頸部の形態は土師器甕に近い(2類)。とりあげ番号等の出土位置は1が①、2が⑥、7が④で、古段階の床面に伴うのは、3(ベルト中央の下層)、4(南拡張区)、6。

⑨SI1 (SL460等) 周辺出土土器 (Fig.9-8~19)

古墳時代末の竪穴建物や周辺の整地層から出土した土器である。8は土師器甕、9は須恵器壺、10は須恵器杯身である。11・12は須恵器系土師器甕の口縁小片で、口縁端部は須恵器のような凹面となっている(1類)。13は須恵器杯蓋、14は須恵器杯身、15~18は土師器高杯、19は須恵器系土師器小型甕の1類である。外面は木目直交の平行タタキ、内面はハケ目状であるが、細筋の平行文当て具痕か。8・19は竈SL460上層出土土器であるが、他は竪穴建物の床層以下の基盤層出土土器であるため、遺構に伴う土器ではないが、時期決定の参考になる。

⑩SI2 (SL602, 603, SD607, ST609, R204, R205等) 周辺出土土器 (Fig.14-4~Fig.15)

4~10は須恵器で、4・5・7は杯蓋、6・9は杯身で外面に×印状のヘラ記号があるものがある。8は有蓋高杯で、内面に青海波状の当て具痕跡がある。脚部には長方形透孔が3単位あったとみられる。10は細頸壺である。灰をかぶり、器表面が荒れている。内面底部に棒頭状の円形圧痕がある。11~13は土師器で、11が甕、12が甕、13が高杯である。出土位置は4がSL602-①、5が同①、6が同③、11が同①・④・⑤、9が同西部の下層、7・8・10がSD607、12がR204である。

Fig.15-1・2はSL602を切るST609(土器棺)の土師器甕である。1は須恵器系土師器甕1類で、外面に平行タタキ、内面に細筋の平行文当て具痕があり、口縁端部が凹面をなす。3~5はSP720出土土器である。3は須恵器杯蓋、4は須恵器杯身、5は土師器杯である。SP720は、SI2の下、地山面で検出したもので、SI2に伴うものではないが、時期決定の参考資料になる。

⑪その他建物関連遺構出土土器 (Fig.10-1・2, 13-6~12)

Fig.10の1・2はSD353(住居址周溝状遺構)出土で、1が須恵器提瓶、2が土師器高杯である。

Fig.13の6~8はSD5150(住居址周溝状遺構)出土で、6が須恵器広口短頸壺、7が須恵器杯身である。8は陶質土器高杯で、11と同一型式。5世紀代であり、遺構の時期を示すものではない。

9・10はSD5134(住居址周溝状遺構)出土で、前者は須恵器杯身、後者は土師器高杯である。

11・12は掘立柱建物SB11出土土器である。11はSP5155出土の陶質土器高杯で、口縁周り1/6残存の破片である。口縁端部に平坦面、身中位に段をもつ。胎土に砂粒をほとんど含まず紫みのある灰色硬質の焼成である。後述する初期須恵器(Fig.30-1等)と類似形態。12は須恵器杯身である。遺構は12の時期であり、11は混入とみられる。

⑫SK5124・5125出土土器(Fig.12-2~13-5)

古墳時代後期後半~末の溝状に連続する土坑群出土土器である。Fig.12の2は土師器甕等の把手、3~5は土師器甕である。3は内外面磨滅が著しいが、須恵器系土師器2類である可能性が高い。6・7は土師器壺である。8は須恵器壺または小型甕胴下半部で、外面に灰をかぶる。Fig.13の1は須恵器杯身、2は須恵器甕の口縁部、3は土師器甕である。4・5は須恵器系土師器甕の1類である。4は頸部下にカキ目が施される。12-2~7・13-1・4はSK5124北部、12-8、13-5は同遺構南部、13-2・3はSK5125出土。

⑬SL682・SK624・625・683・686出土土器 (Fig.16~Fig.18-9)

1~7はSL682出土の土器である。1は須恵器杯身、2は土師器鉢、3は土師器高杯、4・5は須恵器系土師器1類の甕口縁、6は須恵器系土師器甕、7は土師器甕底部である。Fig.17-1は同遺構出土の須恵器大甕である。頸部外面に平行沈線と斜線文を羽状に組み合わせた文様を施す。

Fig.16-8~11はSK683出土の土師器である。8は須恵器系土師器甕で外面に木目直交の平行タタキ、内面に細筋の当具痕がある。9も須恵器系土師器の甕又は壺で、外面に格子目タタキ、内面に平行線文当具痕がある。10は高杯、11は壺である。

12~15はSK686出土土器である。12~14は須恵器で、12が杯蓋、13が杯身、14が高杯か壺の脚部である。15は須恵器系土師器甕で、最下層出土である。外面に木目直交の平行タタキ、内面に細筋の平行線文当具痕がある。

Fig.16の16~20、Fig.18の1はSK624・625周辺の遺構面出土須恵器である。ただし、20はSK624⑥と接合。16は甕、17~19は蓋、20は身である。18-1は複合口縁を有する須恵器甕である。Fig.18の2・3・4・7はSK624、5・6・8・9はSK625出土土器である。2は須恵器杯蓋、3は須恵器杯身、4は須恵器広口壺、5・6は土師器甕、7は土師器甕、9は土師器高杯である。8は須恵器杯身で、色調は赤褐色を呈する。

⑭SK674出土土器 (Fig.19-1~15)

1~8・10~12・15は須恵器である。1~3は杯蓋、4~8は杯身である。4は内面にへラ記号文がある。口縁に重ね焼きの別個体片が付着。10は椀、11は壺、12は提瓶、15は甕である。13は土師器甕底部、14は土師器高杯脚部である。

9は陶質土器の杯で、百済系の身と考えたが、蓋である可能性もある。口縁が短く、受部が段をなす程度である。内面に藁灰痕があり、胎土は微砂を少量含む。

3・9が上層出土、1・2・5~8・10・11・14・15が下層出土。

⑮SD1000・1002・SP1003(Fig.18-10~13、19-16~18、20-1・2・4)

谷底面の地山面で検出した遺構群である。10は須恵器杯蓋、11は須恵器杯身である。12は土師器鉢、13は土師器甕である。12はSD1000が切る谷最下層の黒褐色土出土、他はSD1000上層出土。Fig.19-16~18は土師器甕である。16は上層、17・18はSD1000底面のSK1006出土。Fig.20-4は須恵器大甕であるが、谷IV区南中央下層出土 (R102) で、SD1000 上面の可能性が高い。側面タタキ→カキ目→底部タタキの順で調整がなされ、内面は胴下部ほど平行文当具痕をよく残す。

Fig.20-1はSD1002上層出土の須恵器系土師器甕1類である。外面は木目直交の平行タタキ、内面は平行文当具痕で、口縁部は有段気味である。2はSP1003出土の土師器で、山陰系有段口縁壺である。古墳時代中期前半であり、本調査区では最も古い遺構である。

⑯その他の古墳時代後期~末の遺構等出土土器 (Fig.10-3~7、Fig.12、Fig.13-13~20、Fig.14-1~3)

Fig.10の3・4はSK578出土の土師器壺と甕である。5はSK579下層出土の土師器甕である。6はST421(土器棺)の土師器甕である。7はSP5115出土の須恵器広口短頸壺で、頸部外面に櫛描波状文とへラ描波状文がある。Fig.11~12-1はSX541出土の土器であるが、遺構は平安時代のもので、土器はSK5124上面周辺からの混入か。1~4は須恵器甕である。12-1は土師器甕である。Fig.13の13はSP619出土の須恵器杯身である。14・15はSP676出土で、14は須恵器杯身、15は土師器甕等の把手である。16はSP628出土の須恵器杯蓋である。外面天部は静止ナデ(板目)調整でへラ記号がある。17はSP685出土の須恵器有蓋高杯である。内面に青海波状の当て具痕がある。18はSP727出土の土師器甕である。19・20はSK678出土で、前者は須恵器椀、後者は土師器甕である。Fig.14の1・2は601出土須恵器で、1は甕、2は杯蓋である。3はR207の須恵器短頸壺で、SI2の竈SL602の北側近接地の遺構面で出土したものである。

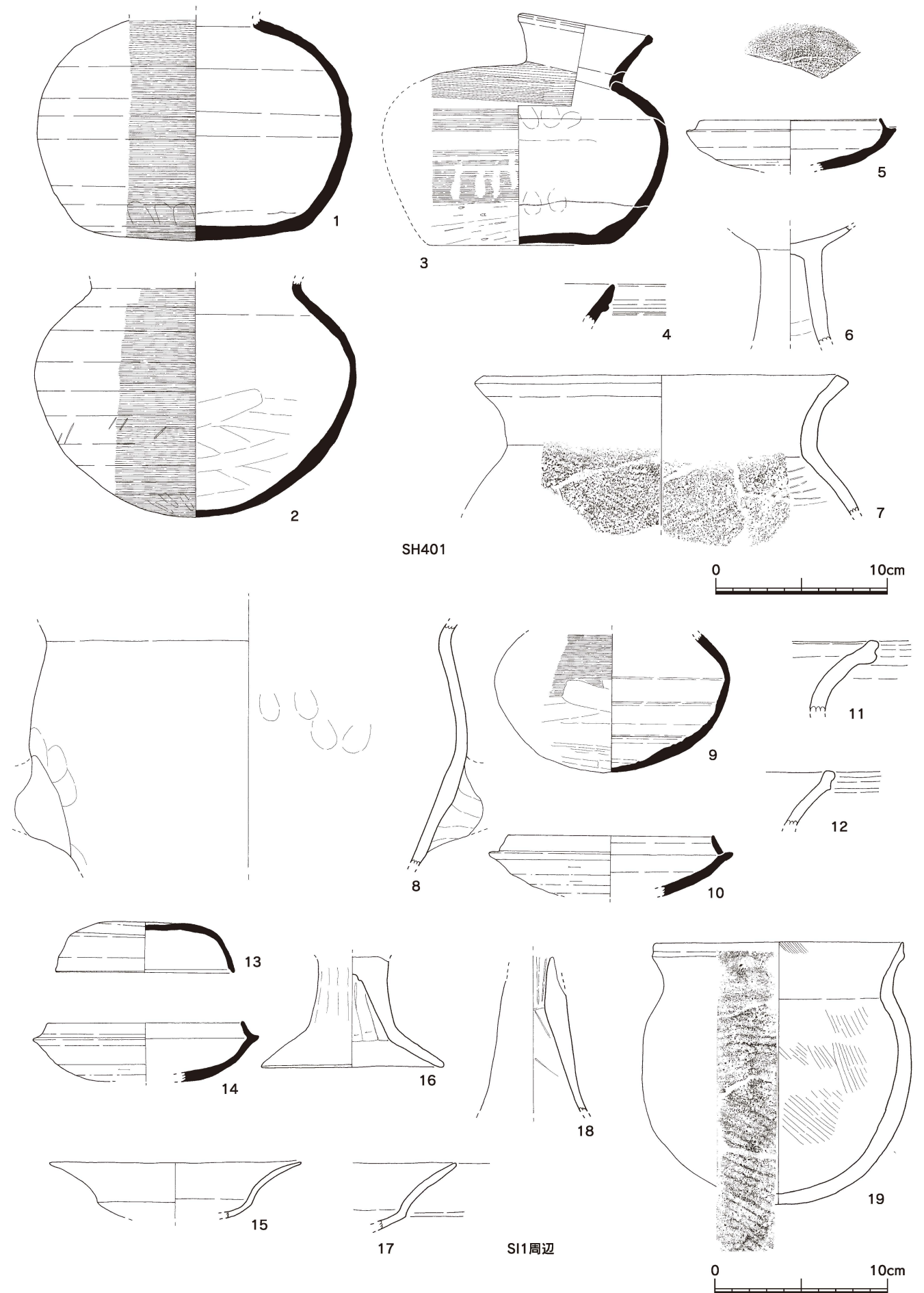


Fig.9 土器実測図 (SH401、SI1等出土 1/3)

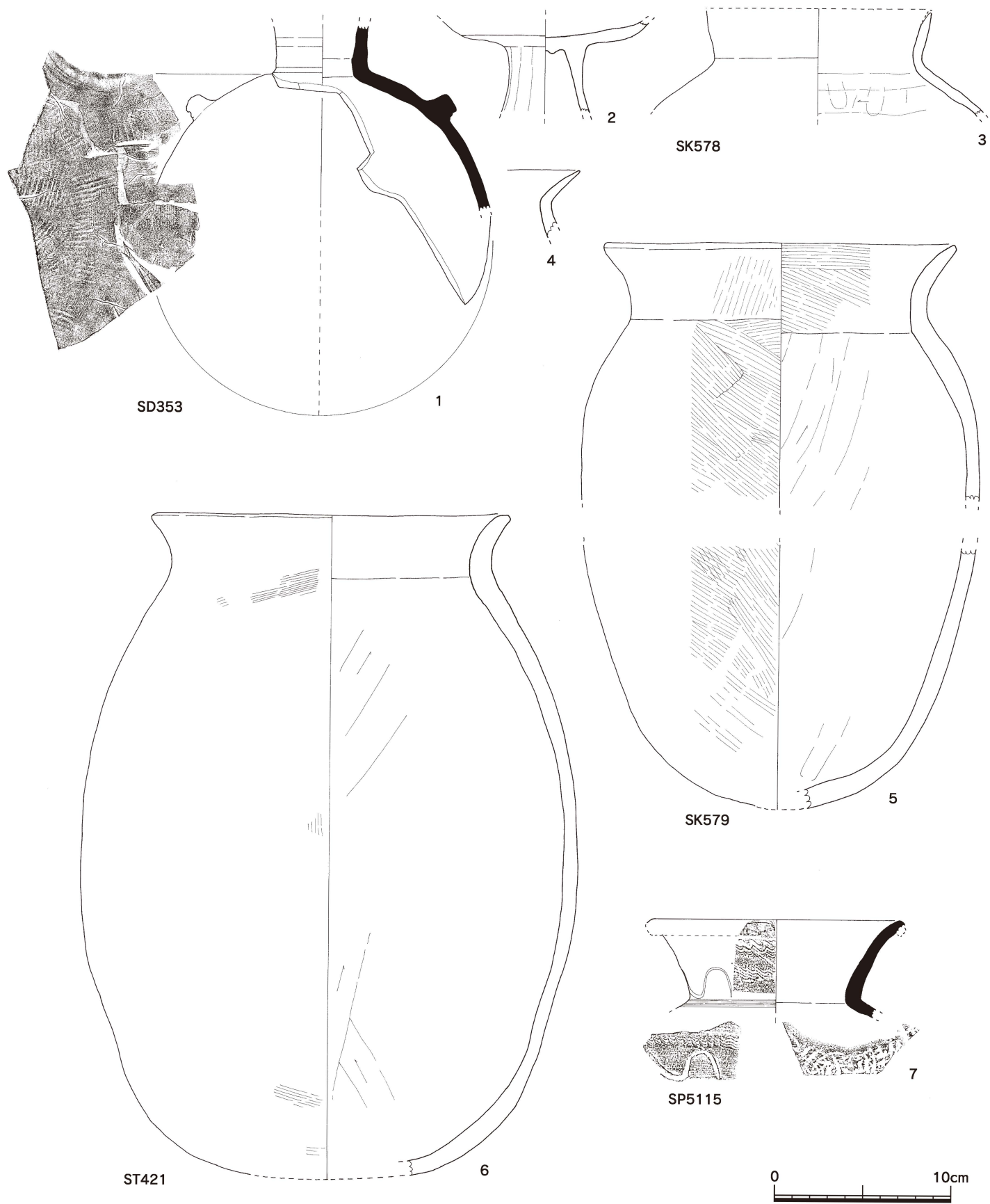


Fig.10 土器実測図 (SD353、ST421等出土 1/3)

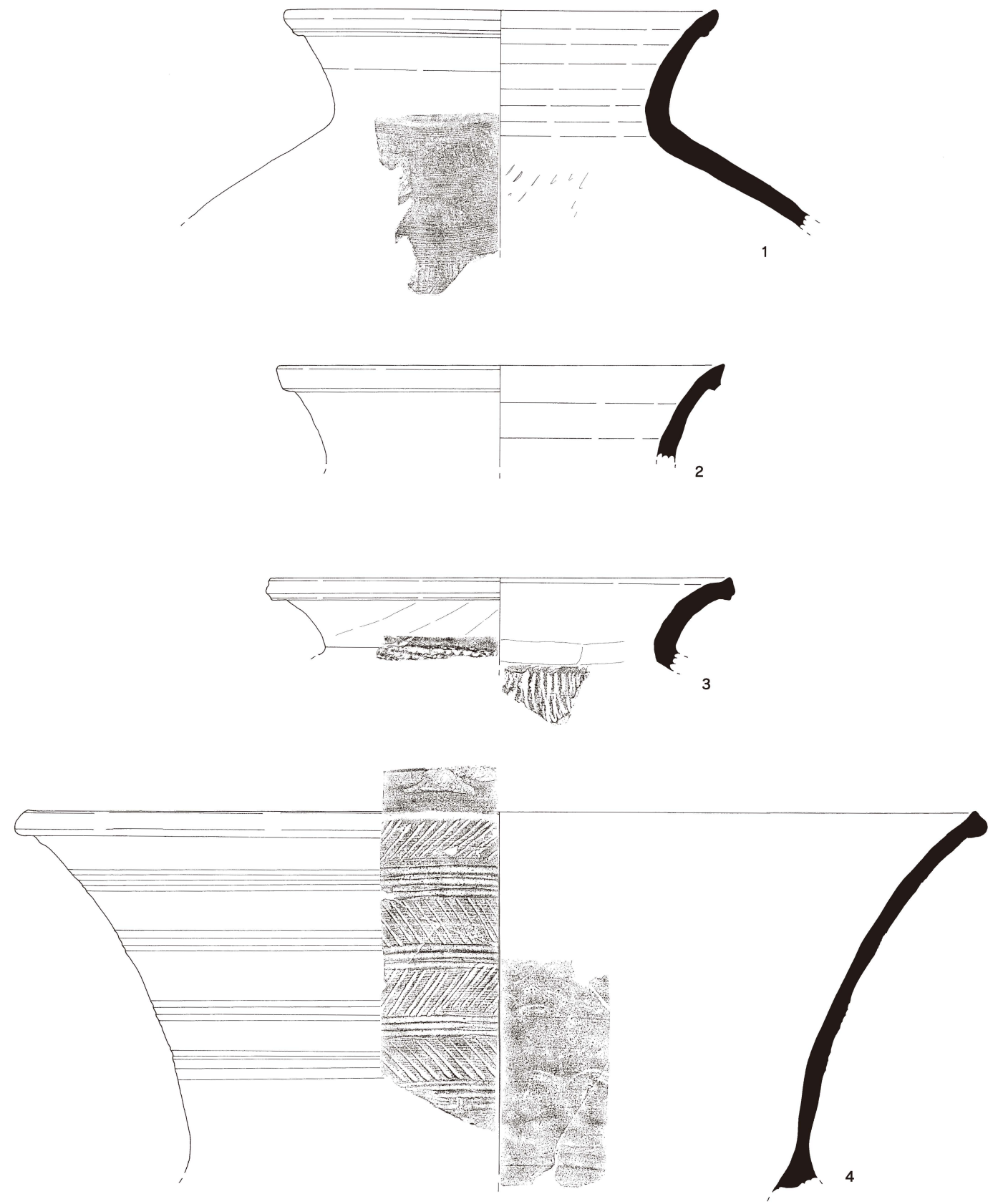


Fig.11 土器実測図 (SX541等出土 1/3)

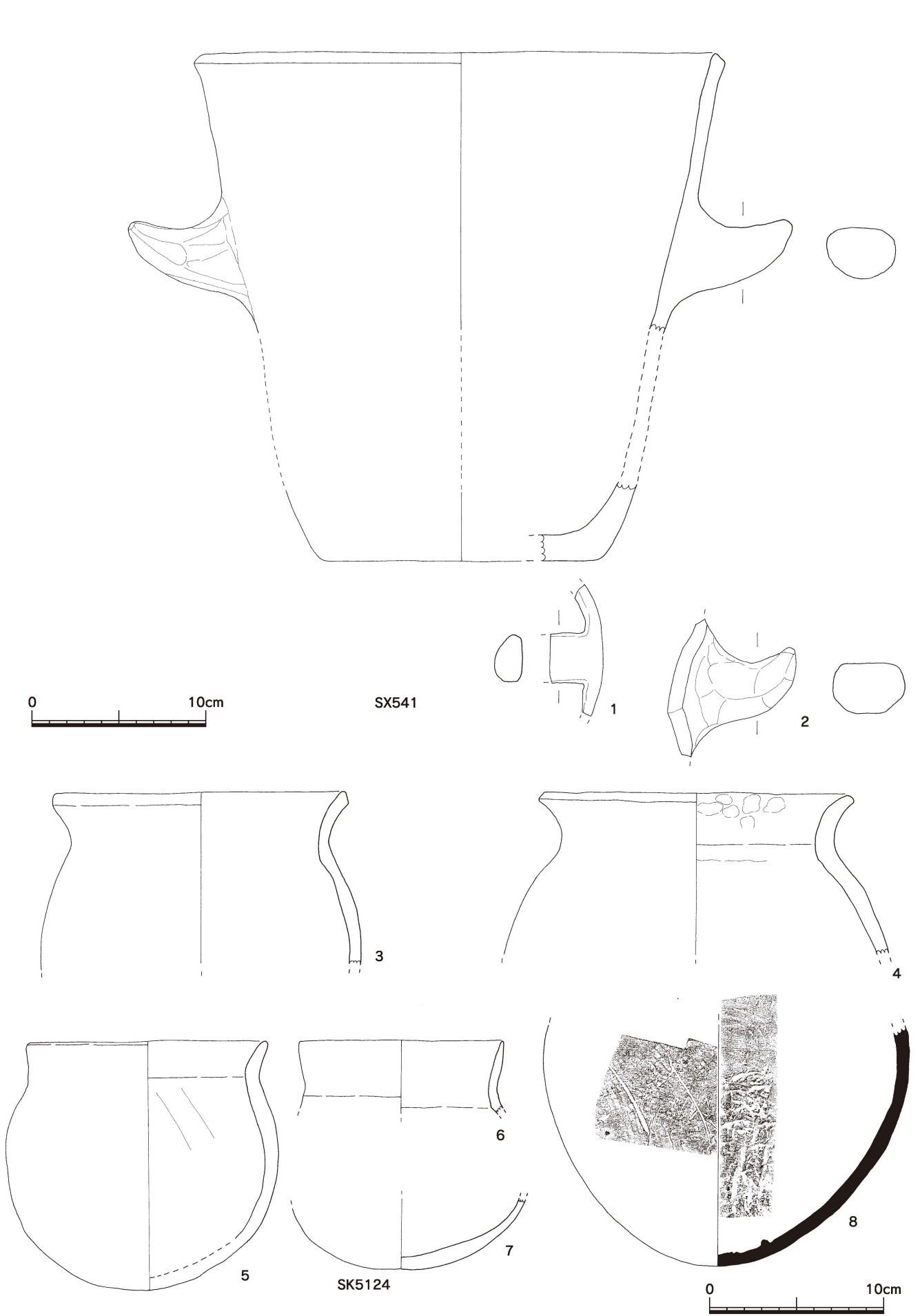


Fig.12 土器実測図 (SX541、SK5124等出土 1/3)

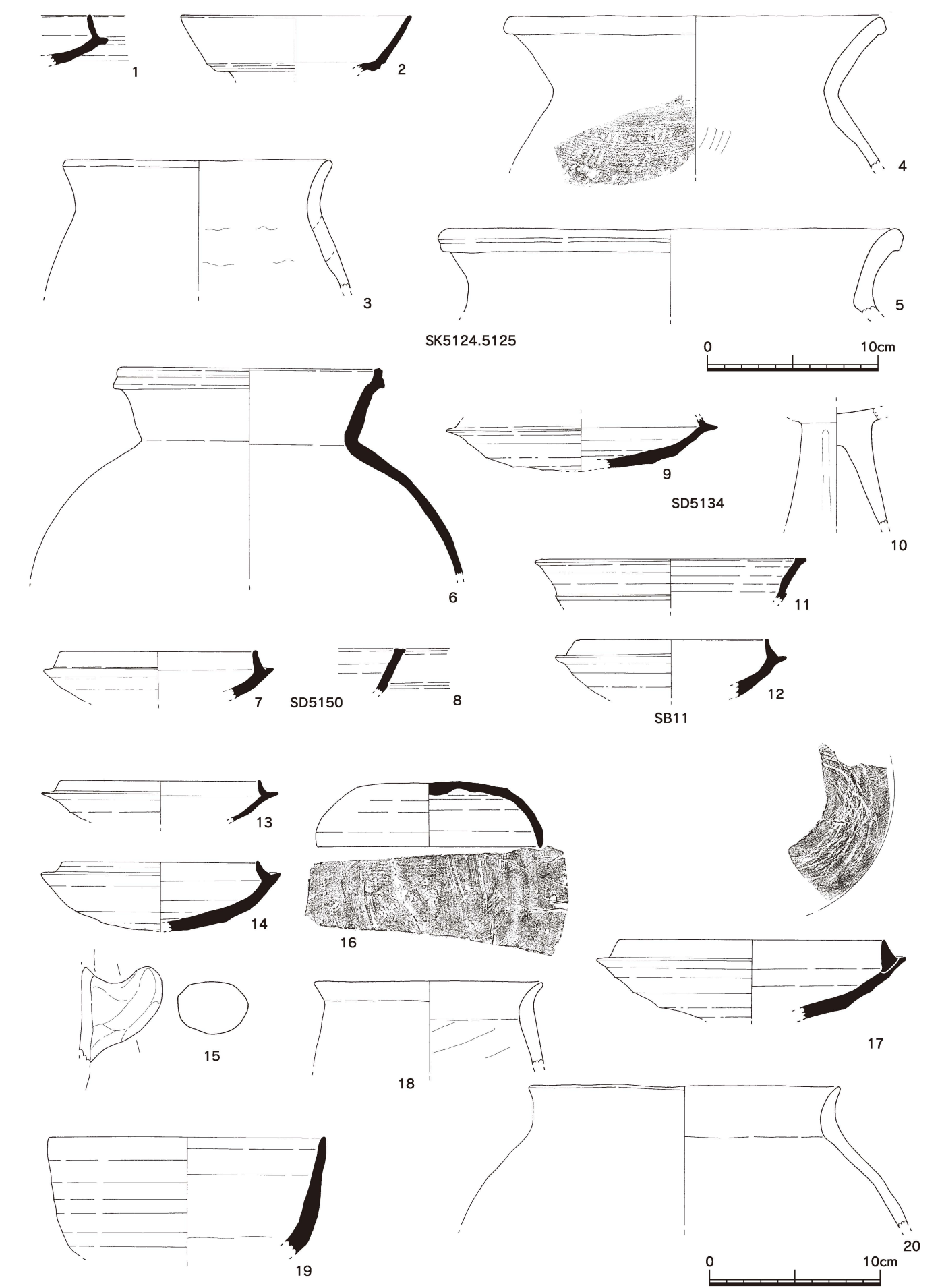


Fig.13 土器実測図 (SK5124、SD5150、SB11等出土 1/3)

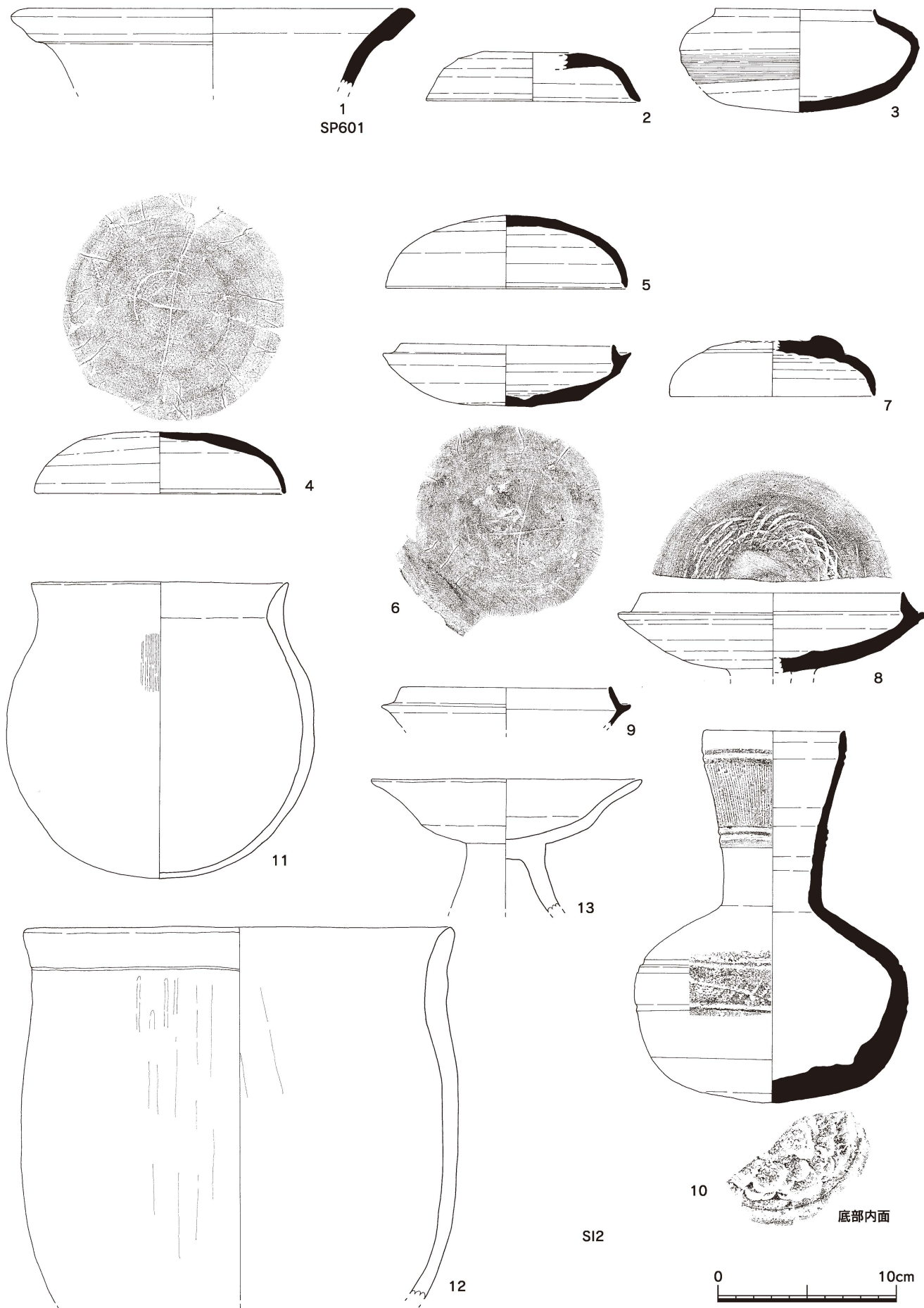


Fig.14 土器実測図 (SI2等出土 1/3)

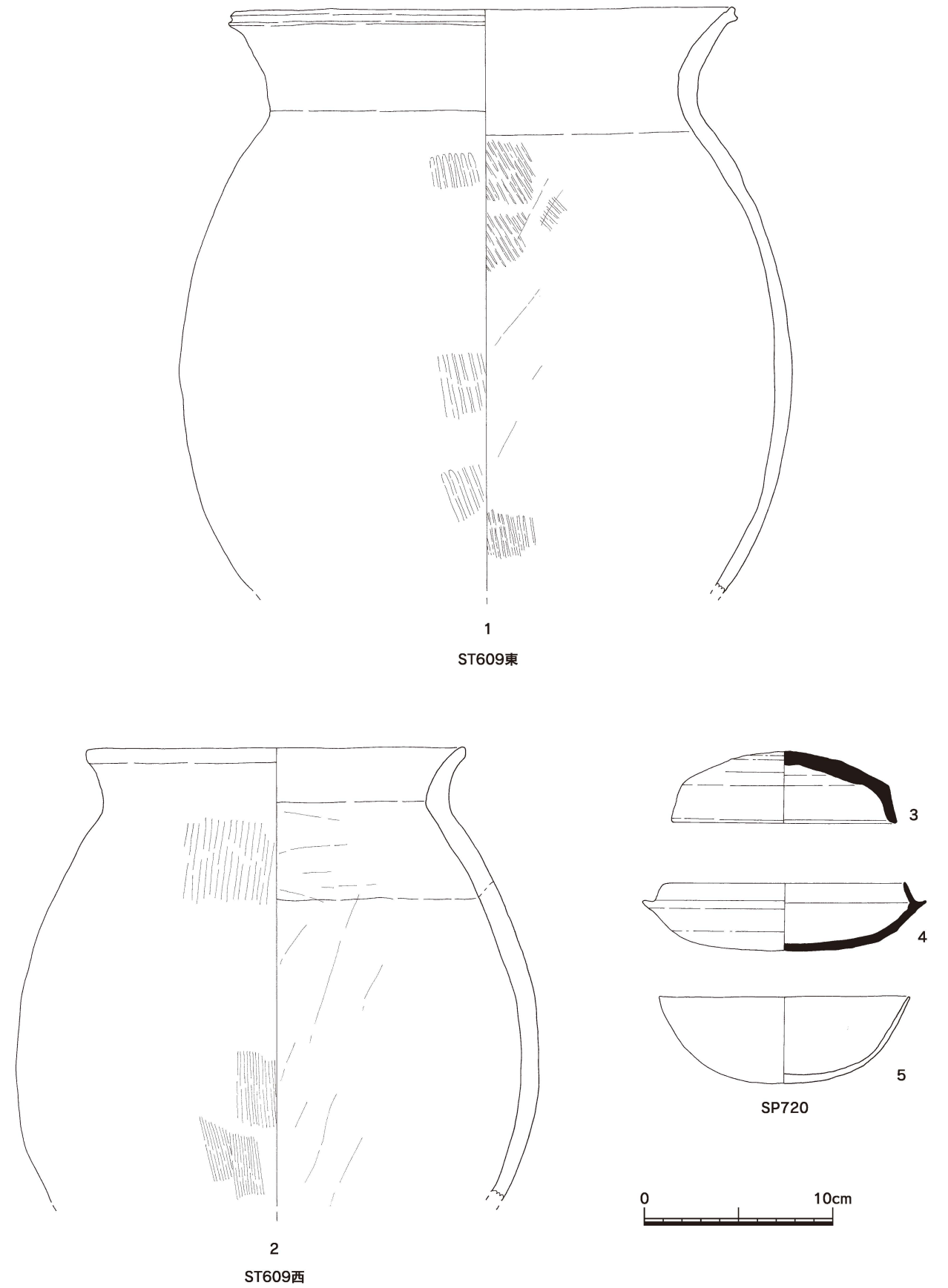


Fig.15 土器実測図 (ST609、SP720出土 1/3)

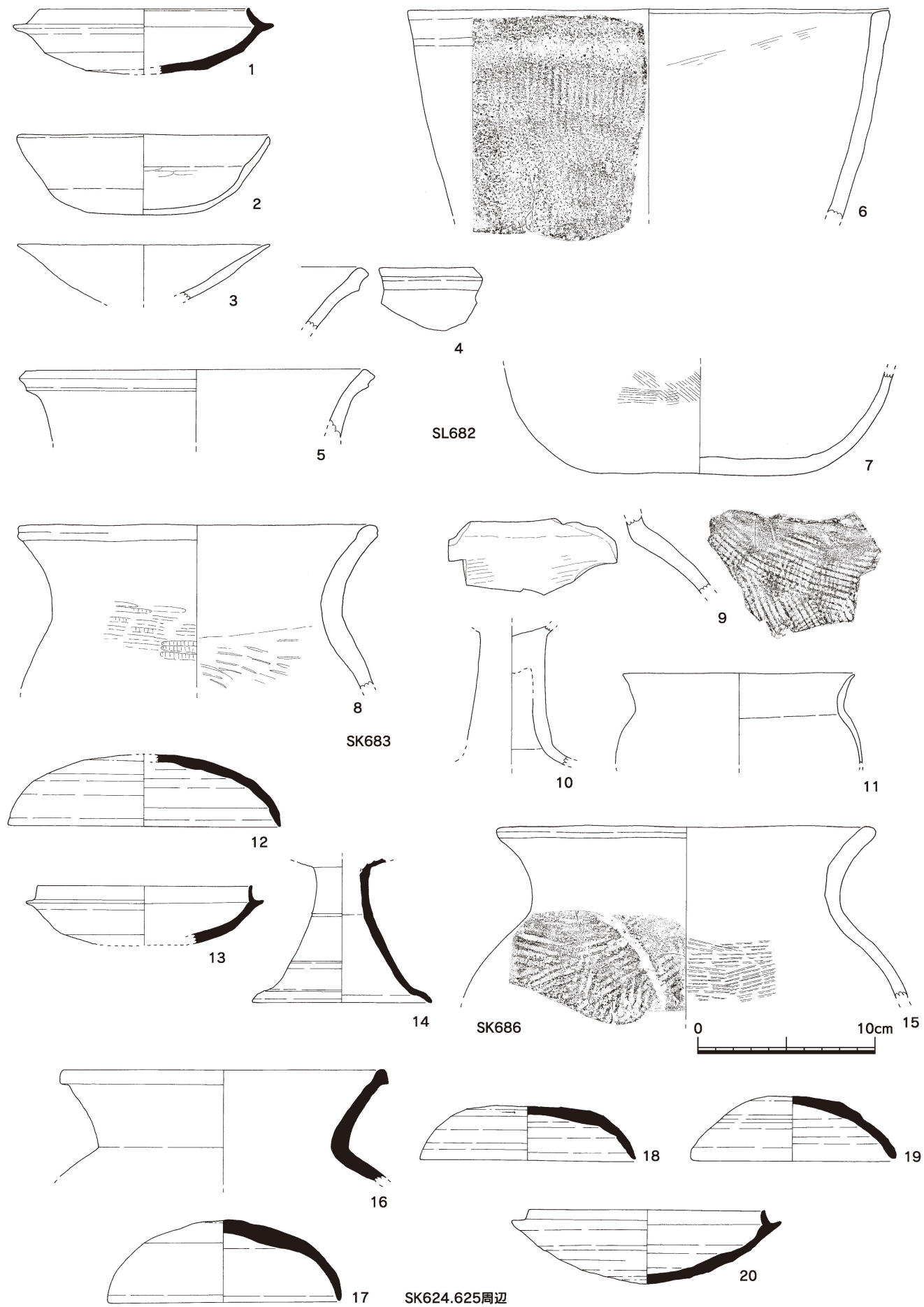


Fig.16 土器実測図 (SK624・625、SL682、SK683、686等出土 1/3)

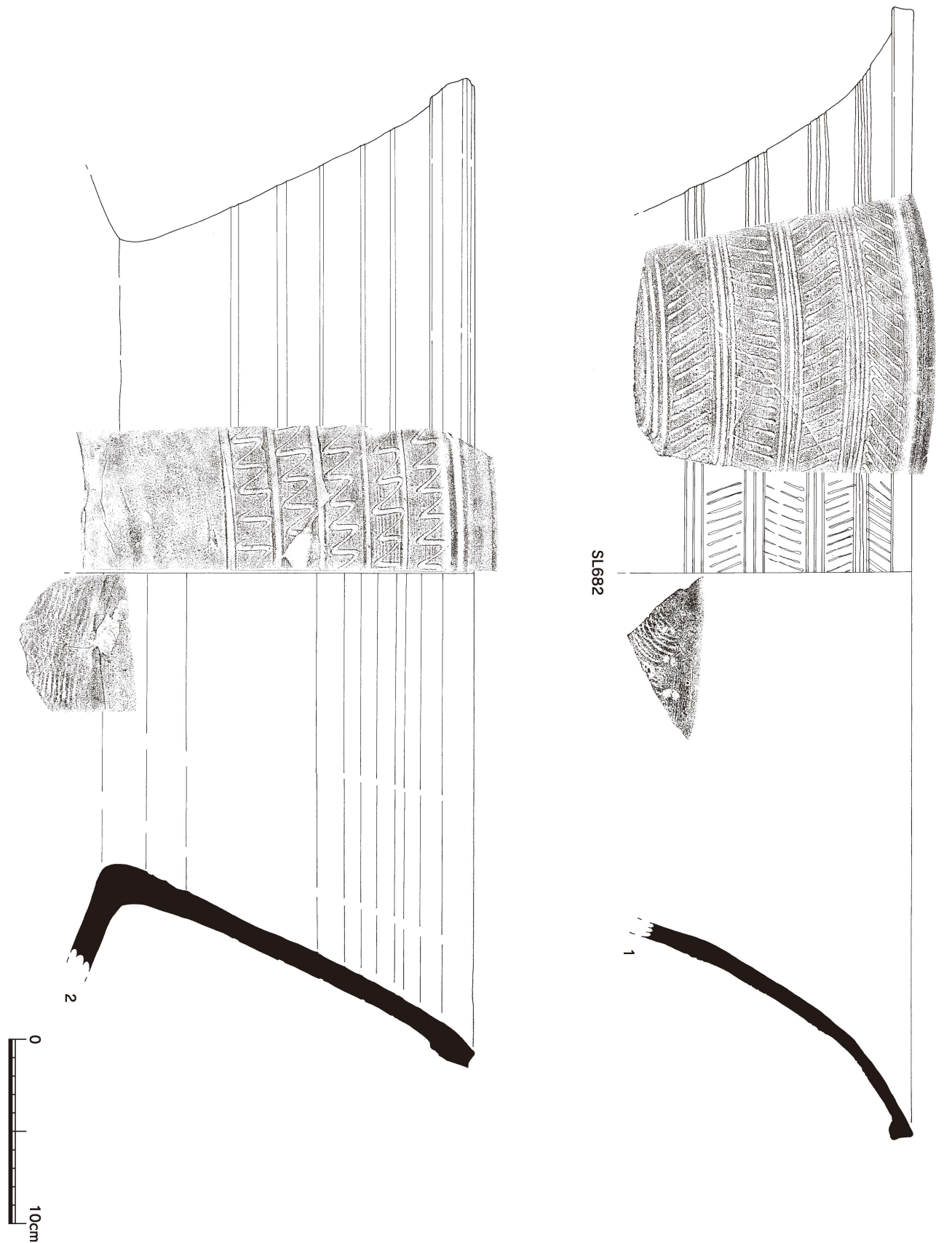


Fig.17 土器実測図 (SL682等出土須恵器大甕 1/3)

Fig. 18 土器美測圖 (SK624・625、SD1000出土 1/3)

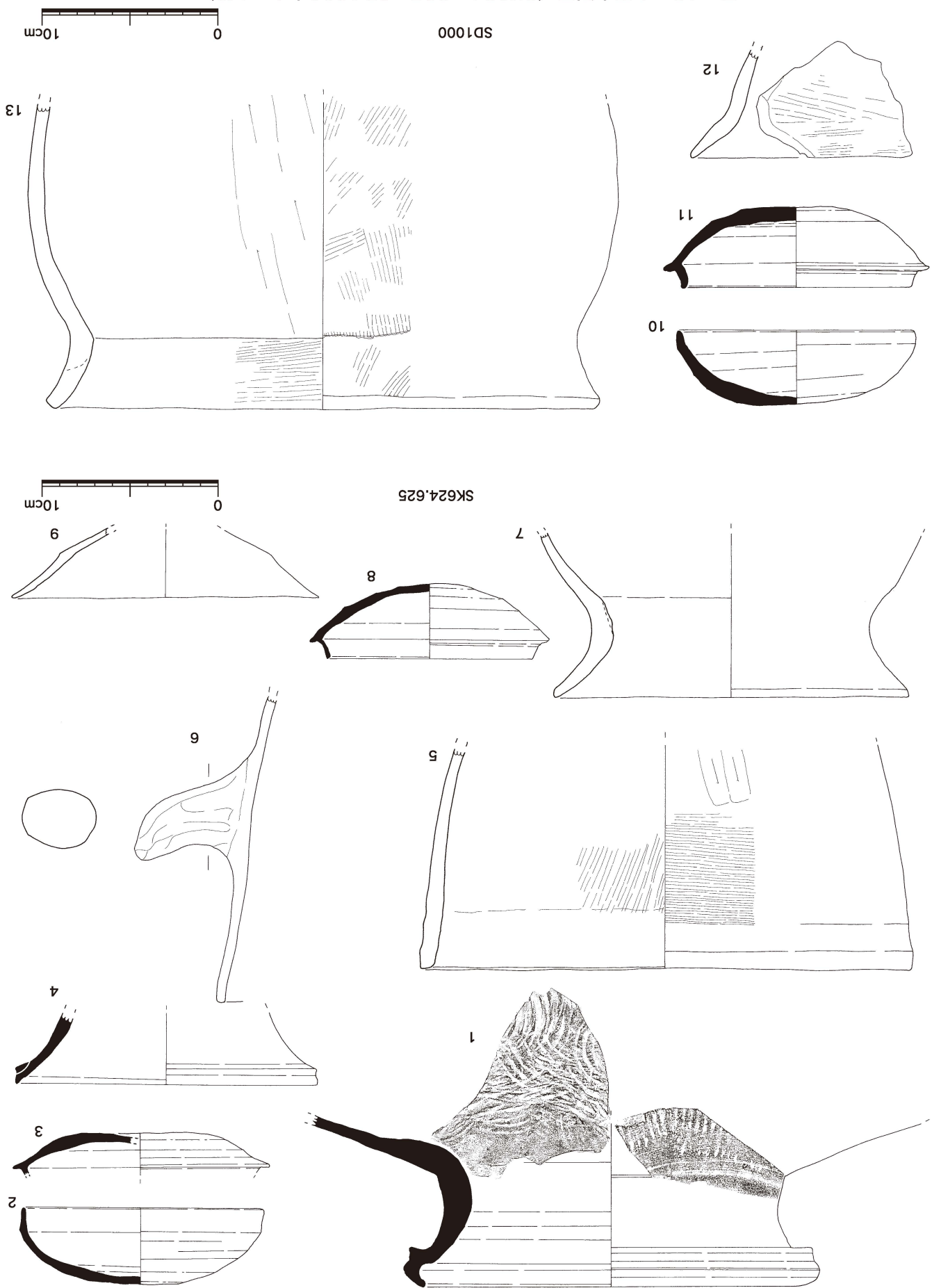
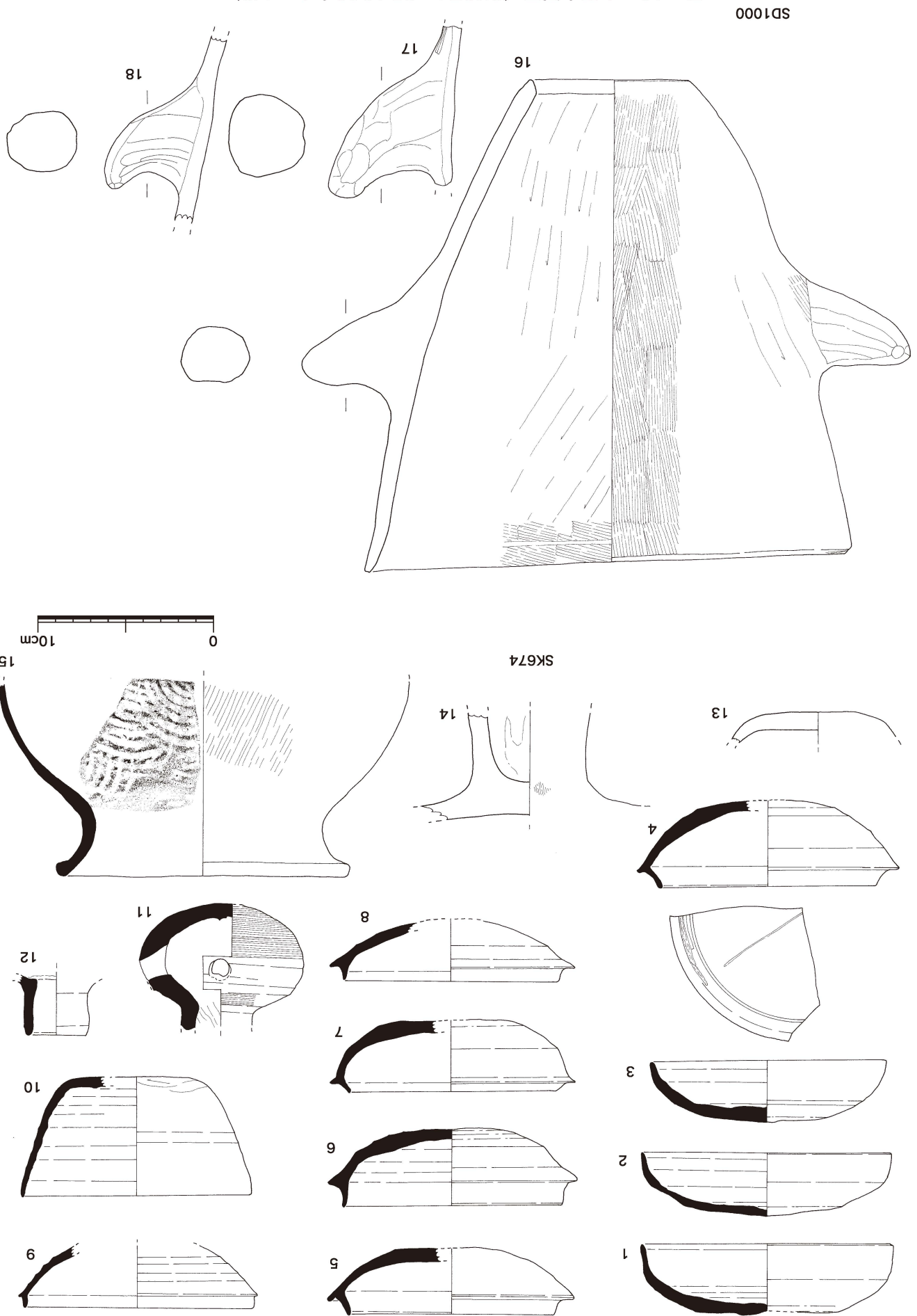


Fig. 19 土器美測圖 (SK674、SD1000出土 1/3)



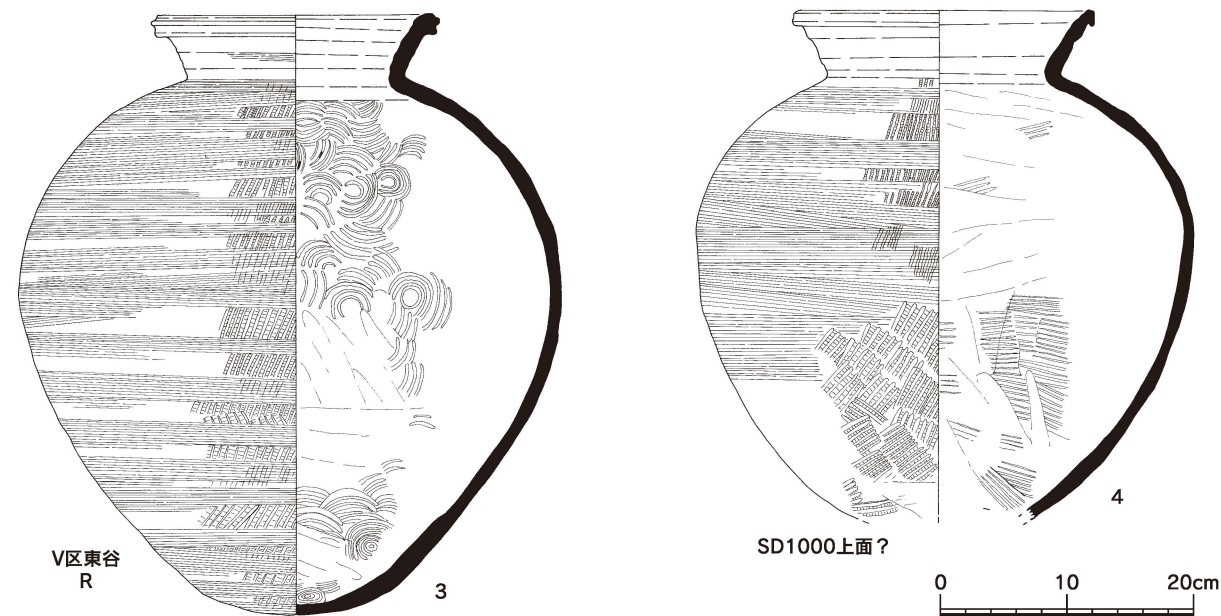


Fig.20 土器実測図 (SD1000、1002、SP1003等出土 1/3、1/6)

⑰包含層等出土の土器 (主に古墳時代後期～末 Fig.17-2、Fig.20-3、Fig.21～29)

Fig.17-2はII-1区西II～III層等出土の須恵器大甕で、頸部外面にヘラ描沈線文と波状文を5段施す。
Fig.20-3はV区谷部出土Rとりあげの須恵器大甕である。谷下層のV層を中心に一定の範囲から出土する破片が、完形の8割ほど接合するので、破碎祭祀である可能性がある。側面タタキと底部タタキの変換点付近で内面の同心円状当具痕も原体が異なっている。胴部中位にカキ目の変換点がある。ほか、外面所々に縄目圧痕状のものがみられる。

Fig.21の1～8は須恵器、9～13、21は土師器、14～20は須恵器系土師器甕である。1は杯蓋で、II-1区IV層、2・3は杯身でI-4区IV～V層、4は杯身でI-5区II層、5は瓶でI-4区IV～V層、6は甕で、I-4区IV層、7は無蓋高杯でI-4区IV～V層、8は提瓶で、II-3区SX014南、9は模倣杯で、I-4区IV～V層、10は高杯でI-5区II～III層、11は高杯でII-1区V層、12・13は小型丸底壺でII-1区IV層出土である。須恵器系土師器甕の14・18・19はI-5区II～IV層、15～17はII-1区IV層、20はI-4区IV～V層出土。21の土師器甕はII-1区IV層出土。

Fig.22の1～9は須恵器、10～13は土師器、14～16は須恵器系土師器甕2類である。1は広口短頸壺で、肩に沈線と列点文が2段施される。V-7区II～III層出土。2は広口短頸壺で外面は横位平行タタキ、IV-2区IV～V層出土。3は頸部外面に櫛描波状文のある瓶で、SX014周辺、4は杯蓋でII西～IV-3区のIV～V層、5は杯身で、I・II区南のV層、6～8は無蓋高杯で、6がIV-2区IV～V層、7がII-1区IV層、8がI・II-2区IV～V層、9が高杯で、II-1区西IV層、10は内面に鳥足状のヘラ記号のある模倣杯で、I・II-2区IV～V層、11は切り込みのある甕把手で、I・II-2区IV～V層、12は小型短頸壺で、IV-2区IV～V層、13は高杯でI・II区南IV層、14はII-1区西IV層、15はIV-2区IV～V層、16はI-4区IV層である。須恵器系土師器甕の調整は外面木目直交の平行タタキ、内面平行文当具痕が多いが、16の外面タタキは擬格子目に近く、内面の平行タタキ当具痕はハケメ状の細筋である。

Fig.23の1・2はIII区包含層出土で、1は底部ヘラ切の鉢で平安時代のものとみられる。2は須恵器杯蓋で外面に一文字のヘラ記号がある。3は肩部に櫛描波状文のある須恵器壺で、IV区東包含層出土。4～16はV区包含層出土の須恵器である。4～6は杯蓋、7～11は杯身である。6は重ね焼きの別個体破片が付着しており、9は赤褐色を呈する。6・7・8の外面にヘラ記号がある。12は細頸壺、13は小型短頸壺、14は有蓋高杯、15・16は高杯脚部である。15の長方形透孔は3単位とみられる。17・18はV区西部のIV層(1面の基盤層)出土(R203)須恵器杯蓋である。17は外面に矢印状のヘラ記号がある。19・20はVI区整地層出土の須恵器で、19が杯蓋、20が小型短頸広口壺である。

Fig.24はVI区の包含層～整地層出土の須恵器で、1～3は杯蓋、4～10は杯身、11は有蓋高杯、12は高杯脚部、13は短頸壺、14は甕、15は提瓶である。5は赤褐色を呈する。10・13は外面にヘラ記号がある。11は内面に青海波状の当具痕がある。

Fig.25-1～4は同出土の土師器である。1は甕、2は鉢、3・4は高杯である。

Fig.25-5～15はII-2区周辺IV～V層出土で、とりあげ番号R101～108の須恵器である。5は平底の短頸広口壺で、外面擬格子目タタキ、内面はナデにより当具痕を残さない。R101A。6は須恵器甕でR102。7は無蓋高杯で、R107～108周辺。8は抹角平底の短頸広口壺で、口縁は有段気味。外面は横位平行タタキで、下半部は回転横ケズリである。肩に縦線3条のヘラ記号がある。器壁が厚く、灰かぶりである。R107。9は杯蓋で、I区西部IV層(ベルト北壁P2)出土。外面に3条平行線のヘラ記号あり。10は杯身で、9と同じ出土位(ベルト北壁P1)。外面に竹管文あり。11は杯蓋で、R107～108周辺出土。12は杯蓋でR108。内面にヘラ記号あり。13は杯身でR103。内面にヘラ記号あり。14は杯身で、R104。15は杯身でR107～108周辺出土。口縁部に重ね焼きの別個体破片が付着。

Fig.26-1は須恵器系土師器の甕で、R106。口縁端部が凹面で、胴外面は木目直交の平行タタキ調整である。2は土師器の甕でR105。

Fig.27は谷下層のV層出土の須恵器である。1・2は杯蓋でI-2区。2は外面にヘラ記号あり。3～7は杯身で、順にI-2区、II-2区、II-3区V～VI層、I・II-3区、IV-2区出土である。5は赤褐色を呈する。8は須恵器高杯で、I・II・IV-4区。9は平瓶で、赤褐色を呈する。II-4区西部出土。10は直口壺で、頸部外面に沈線と櫛描波状文が施される。II-4区。11は小型短頸壺で赤褐色を呈する。VI区北。12は提瓶のような器形であるが、樽形甕のような注口を有する変則的な須恵器である。I・II-2～3区。13～15は広口壺または小型の甕で、順にII-4区、IV-3区、IV-3区出土。16は須恵器甕で、頸部に2段の櫛描波状文と矢印状のヘラ記号がある。17は有段口縁の甕で、II-4区北V～VI層出土。

Fig.28は谷下層のV～VI層出土土器である。1～5は須恵器系土師器甕である。順にIV-2区、II-2区、IV-2区、II～IV-2区、II-4区出土。6は切り込みを有する土師器甕把手で、I・II-5区。7～11は土師器である。7は鉢で、II-2区南西、8は小型丸底壺でII-2区南西、9・10は土師器高杯で、順にII-2区南西、IV-2区、11は長い高杯脚で、II-2区出土。

12～17・19～23はV区東部の谷下層、18はVI区北谷下層出土の須恵器である。12は外面にヘラ記号のある杯蓋で7区VI層出土。13は杯蓋、14～18は杯身である。16は赤褐色を呈する。17は7区VI層出土。19は小型甕、20は瓶の口頸部、21は壺、22・23は高杯脚部である。

Fig.29もV区東部谷下層出土土器。1は須恵器甕、2は土師器鉢、3は土師器高杯脚部である。

⑩包含層等出土の土器、埴輪（弥生時代～古墳時代中期 Fig.30）

1～8は初期須恵器である。色調は灰白色で、やや瓦質気味の焼成である。胎土は微砂を少量含む程度の精良なものである。1は無蓋高杯である。口縁端部に凹面があり、回転ケズリによって身中位に突帯状の段を作出している。脚部は短く、裾上位に段があり、直上の円形透孔は3単位である。脚柱部は中実である。身下部の内面には当て具痕とみられるやや不整形な円形の圧痕がある。IV-3区南、谷下層のV層出土。2～7も同一型式であり、2～4と6・7はそれぞれ同一個体である可能性が高い。2～4はII区西～IV-3区北の谷IV～VI層、5～7はII-3区谷最下層のVI層出土である。8は杯身である。外面下半部は板状工具回転ナデと手持ちヘラケズリで、内底面に上記のような当具痕がある。II区西～IV-3区谷VI層出土。

9・10は土師器で、布留式系譜の末期型式とみられる。9は甕でII-4区北谷下層、10は口縁端部に内傾面があり、頸部に突帯のある広口壺で、I-4区西谷IV層下部～V層である。

11は弥生後期の器台で脚部に貫通しない円形孔がある。

12は埴輪で外面に丹塗りが施される。丸隈山古墳のものか、それと近い時期のものである。II-1区谷V層出土。

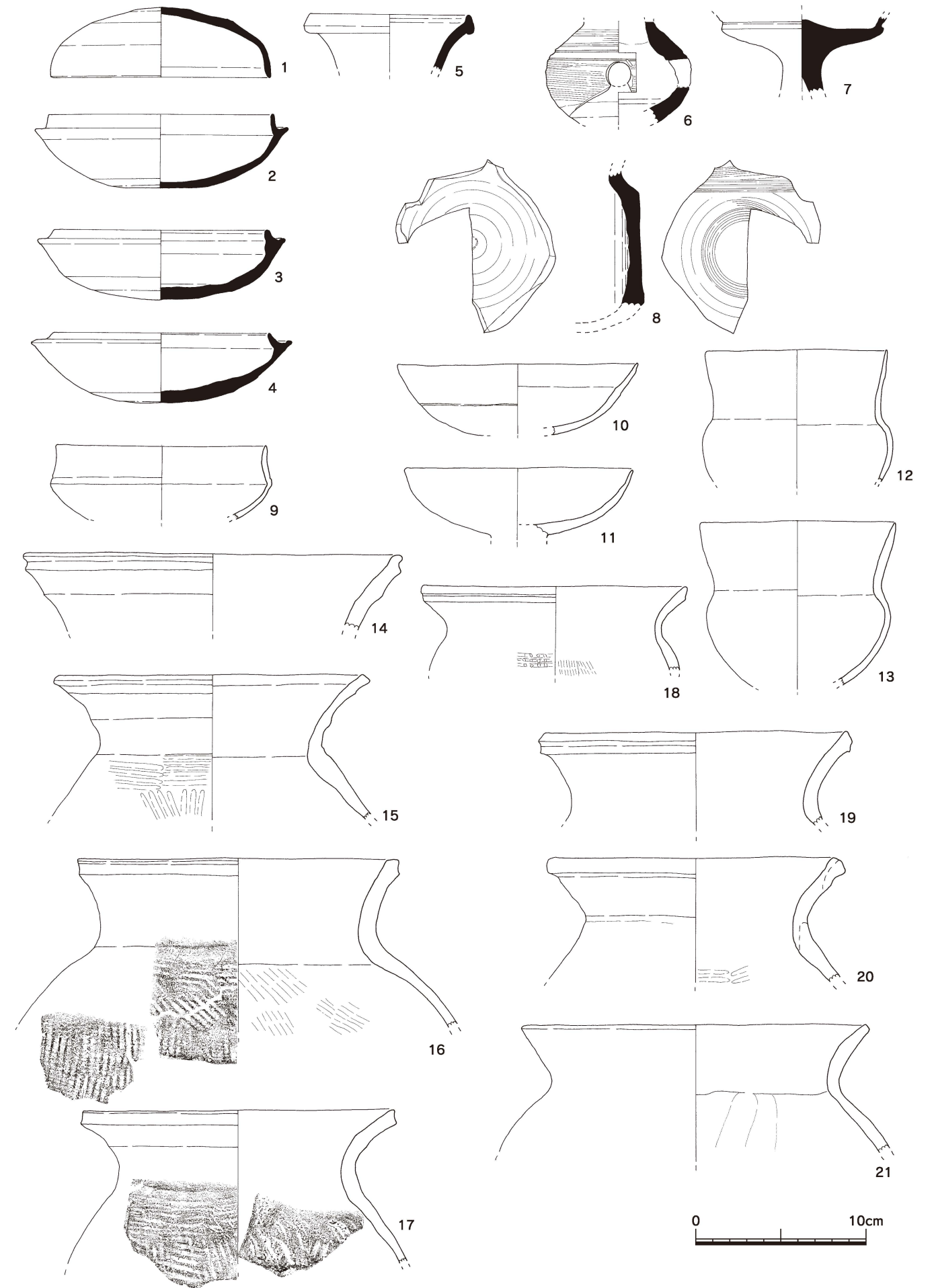


Fig.21 土器実測図（包含層出土④ 1/3）

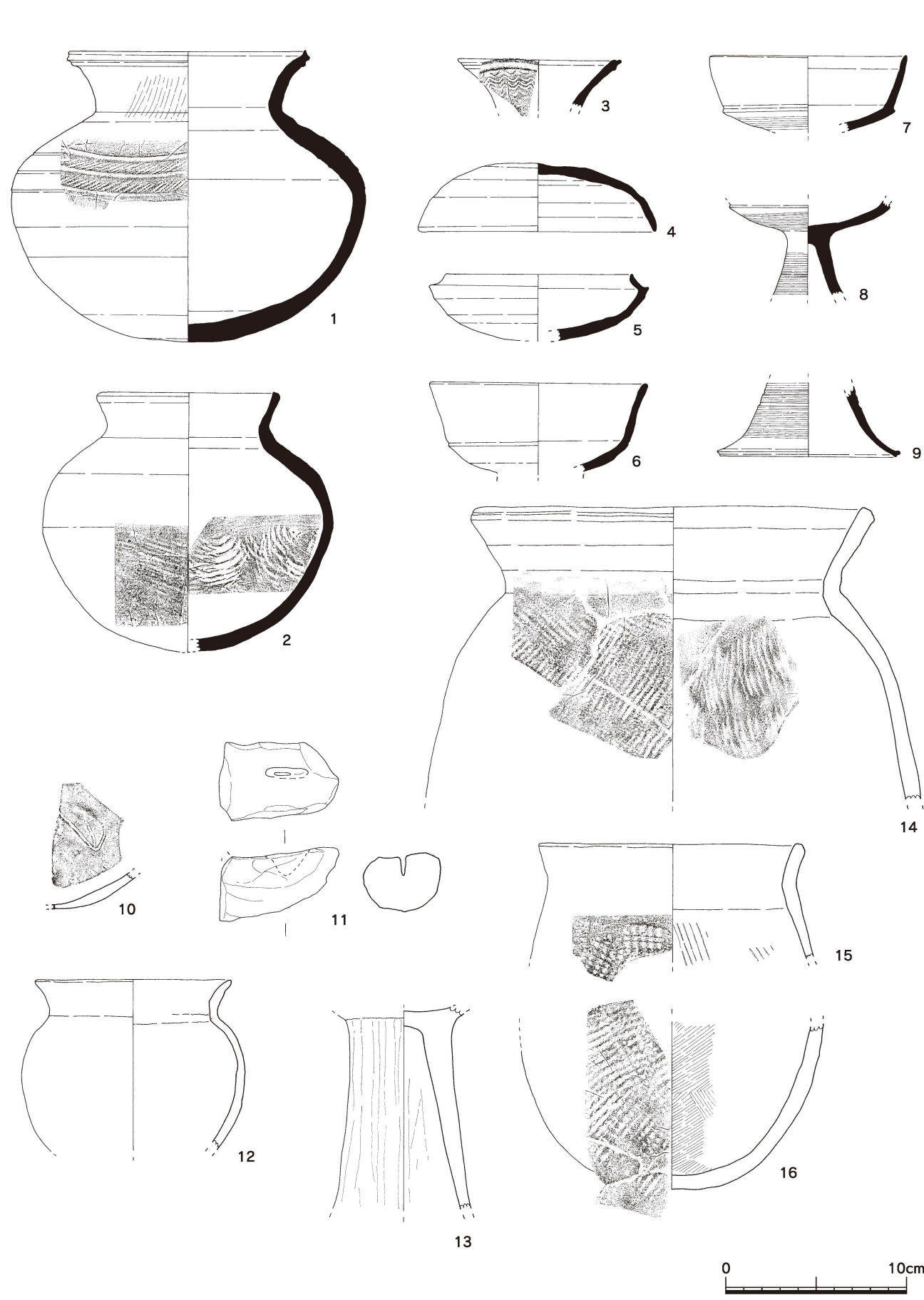


Fig.22 土器実測図 (包含層出土⑤ 1/3)

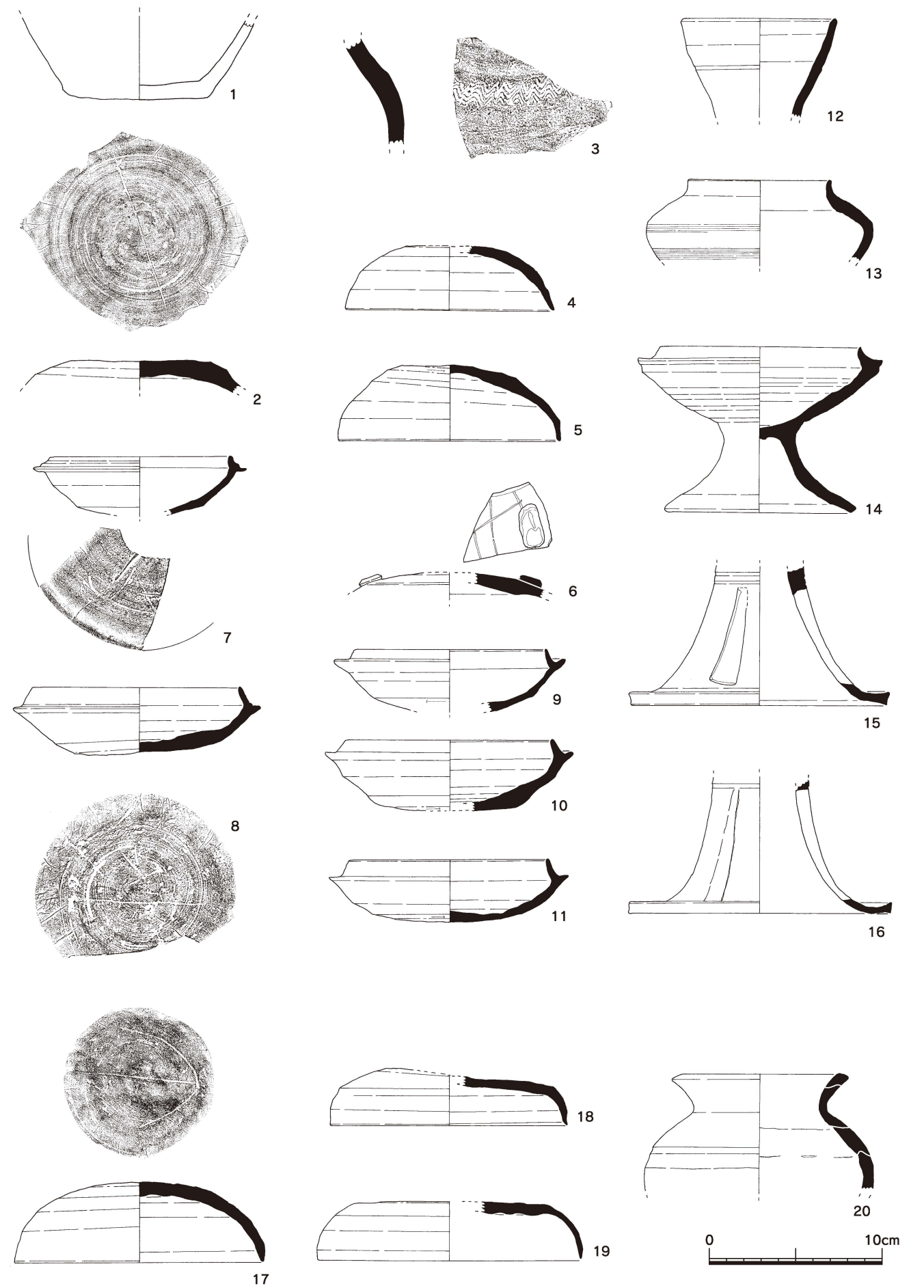


Fig.23 土器実測図 (包含層出土⑥ 1/3)

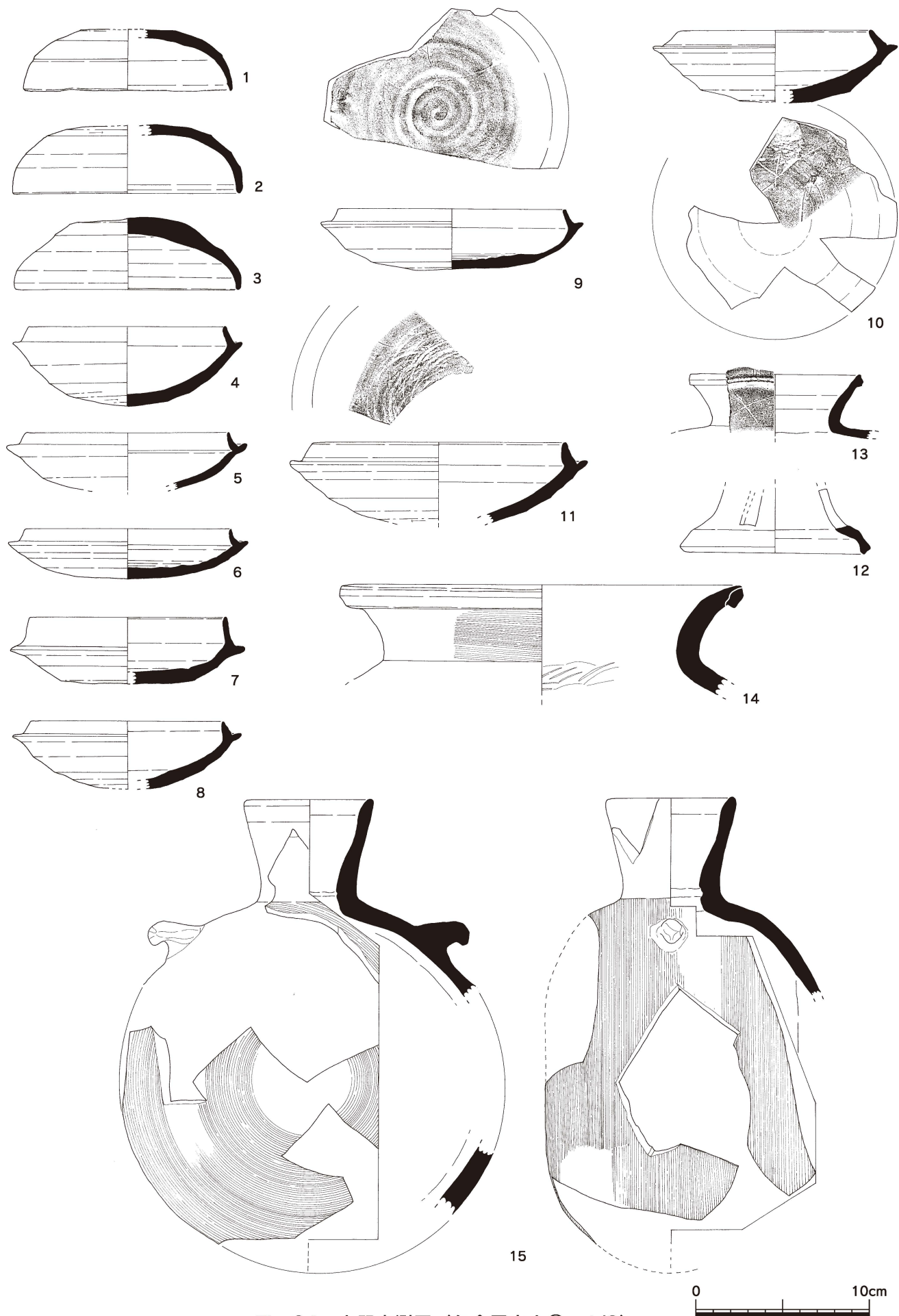


Fig.24 土器実測図 (包含層出土⑦ 1/3)

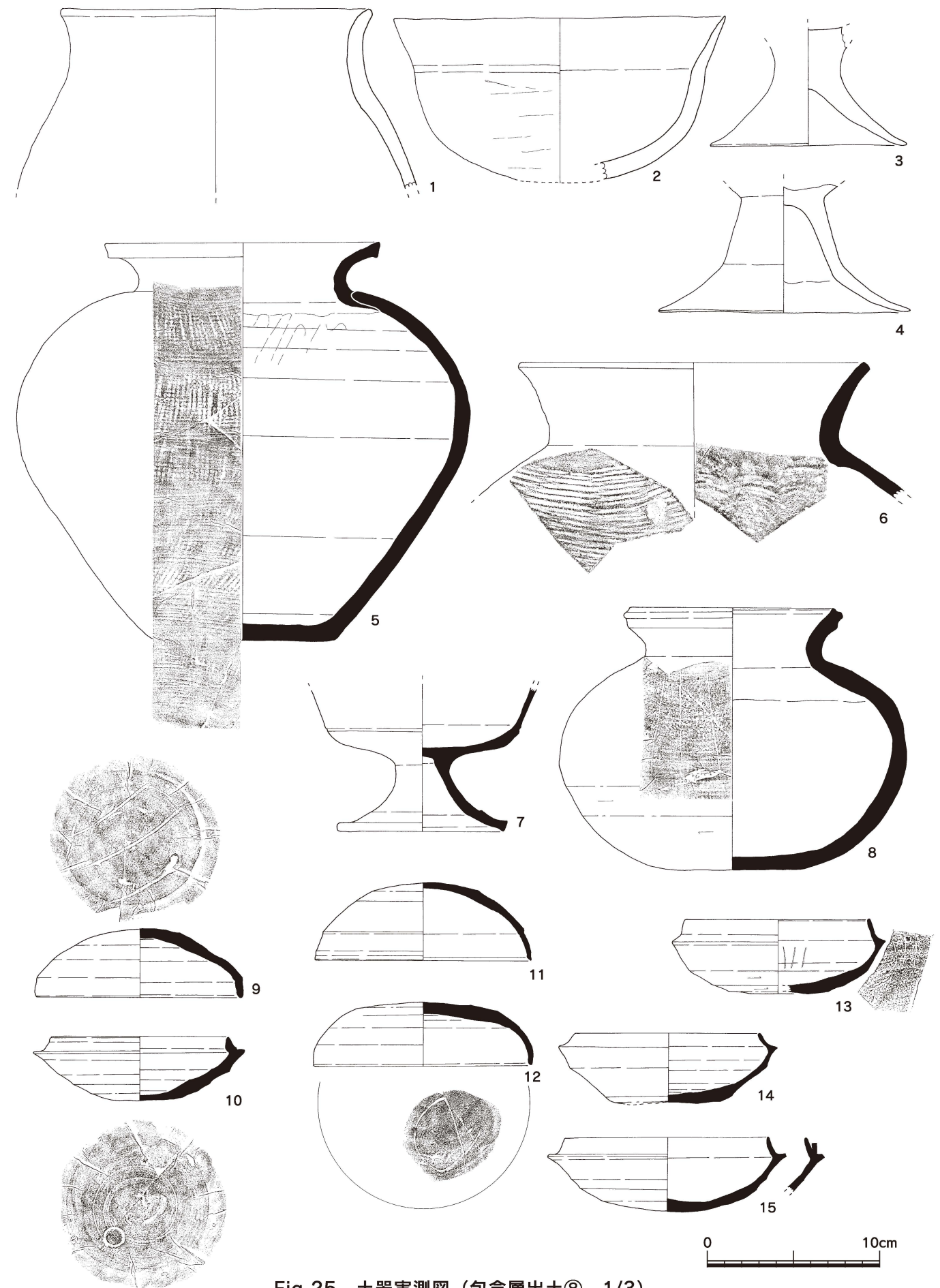


Fig.25 土器実測図 (包含層出土⑧ 1/3)

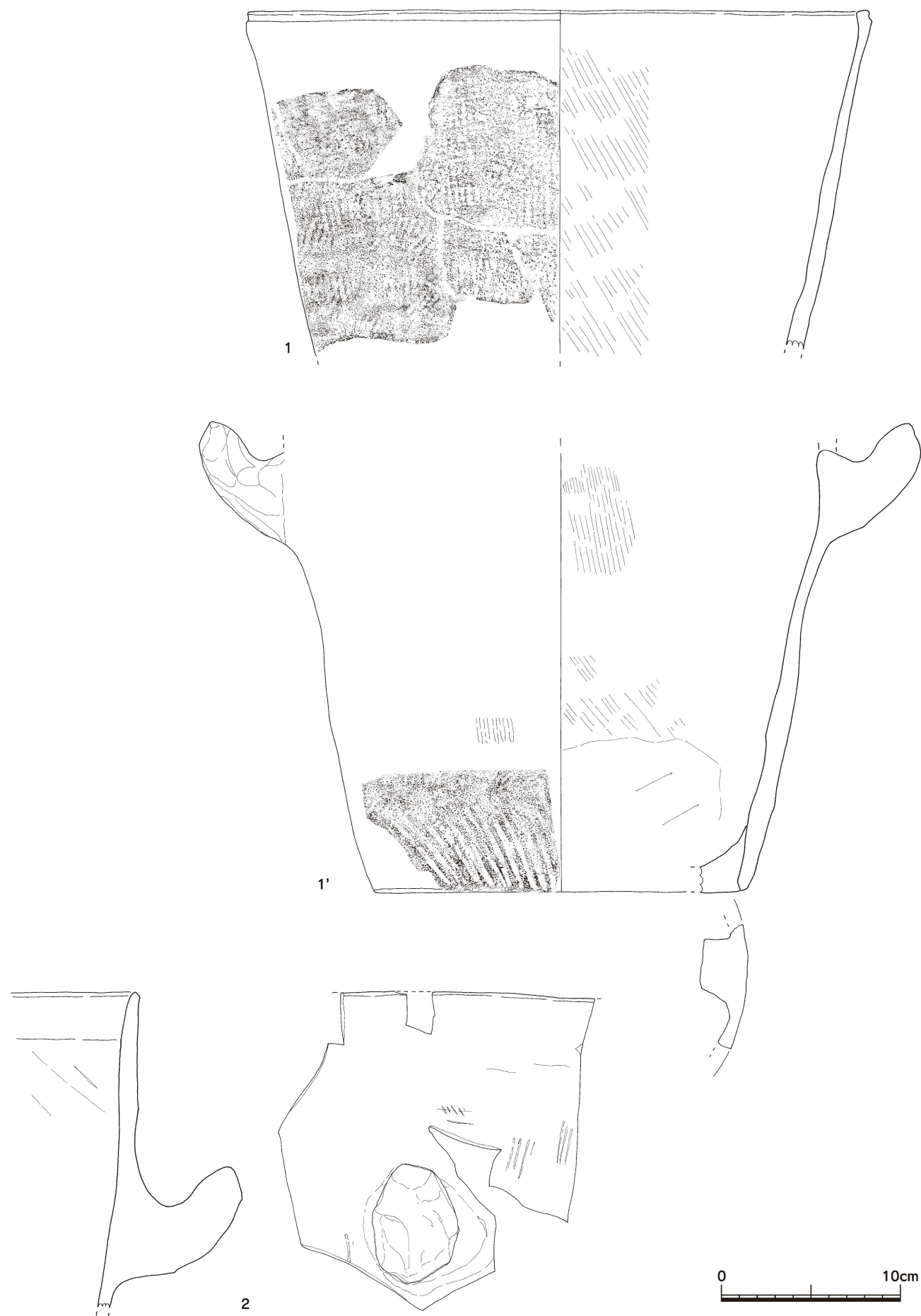


Fig.26 土器実測図 (包含層出土⑨ 1/3)

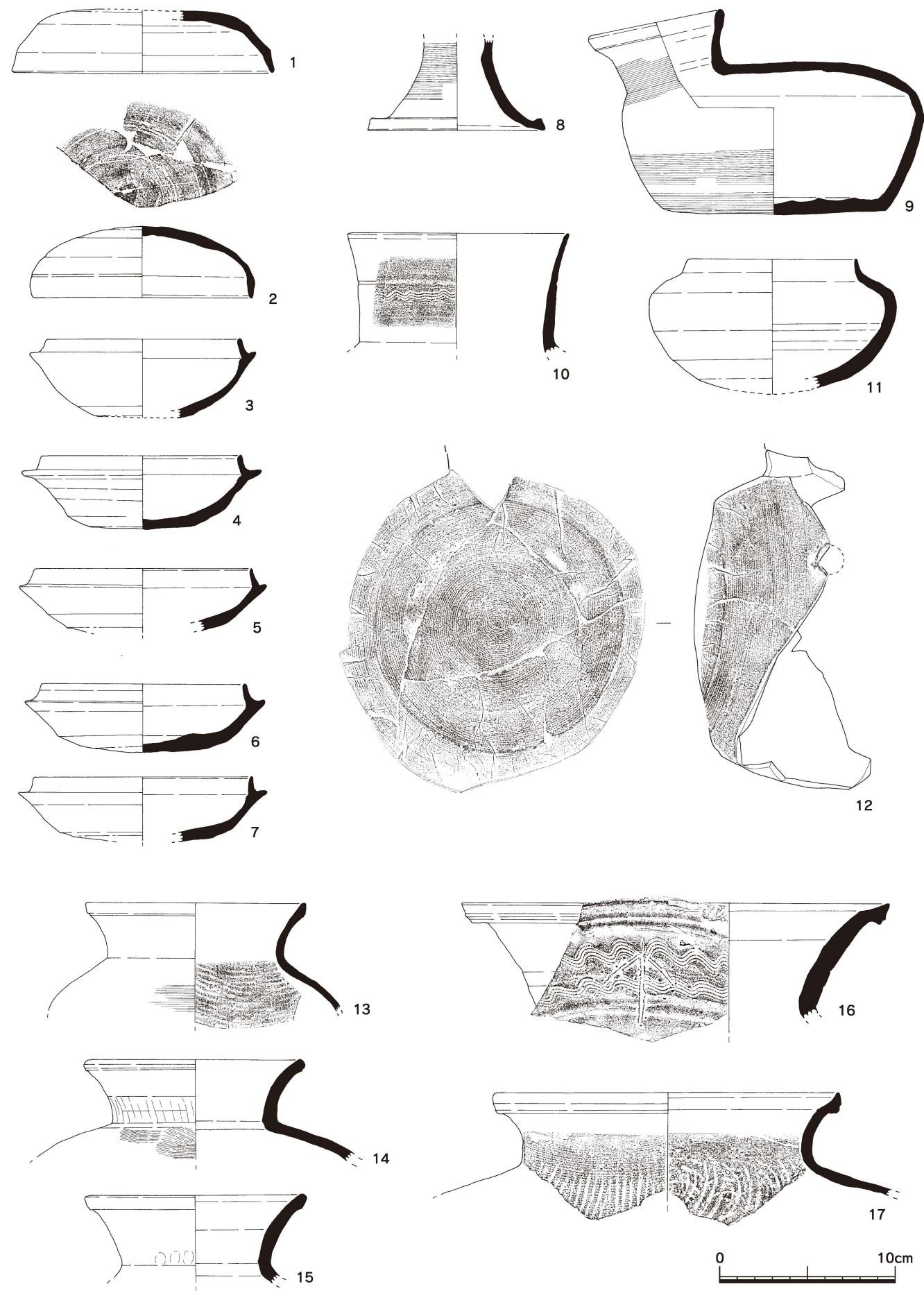


Fig.27 土器実測図 (包含層出土⑩ 1/3)

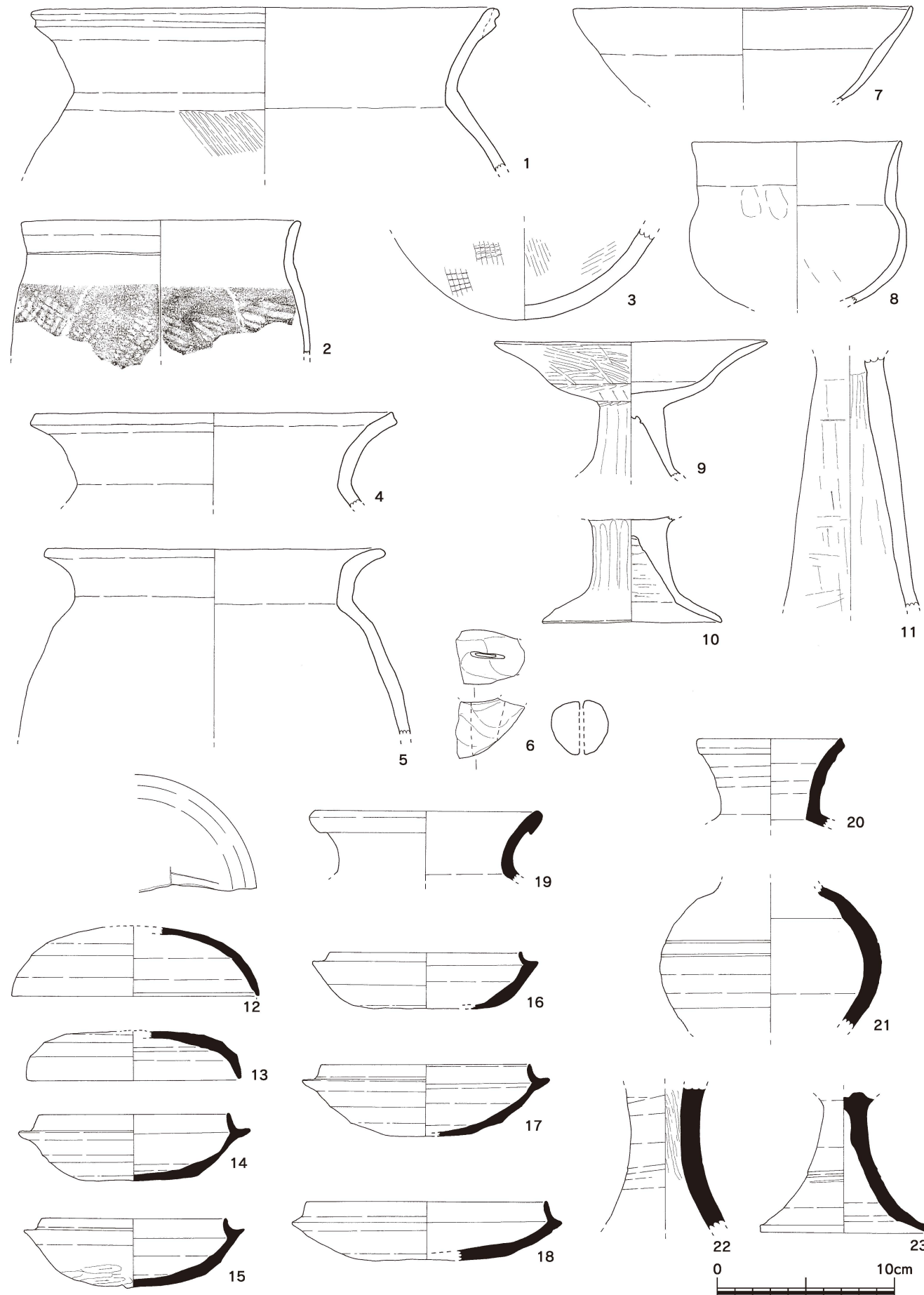


Fig.28 土器実測図 (包含層出土⑪ 1/3)

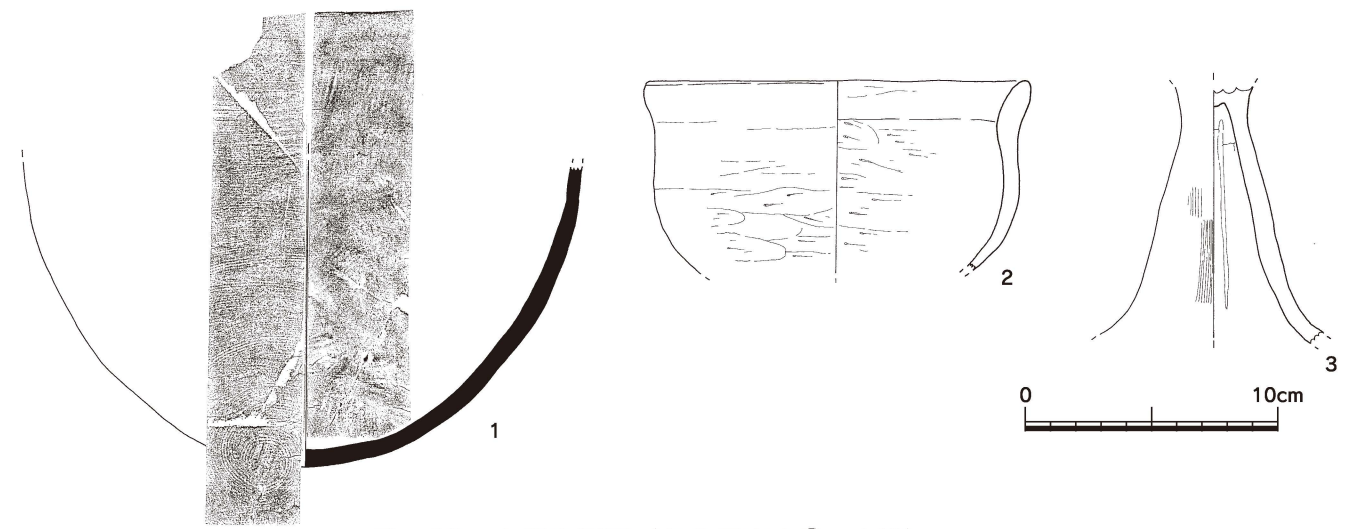


Fig.29 土器実測図 (包含層出土⑫ 1/3)

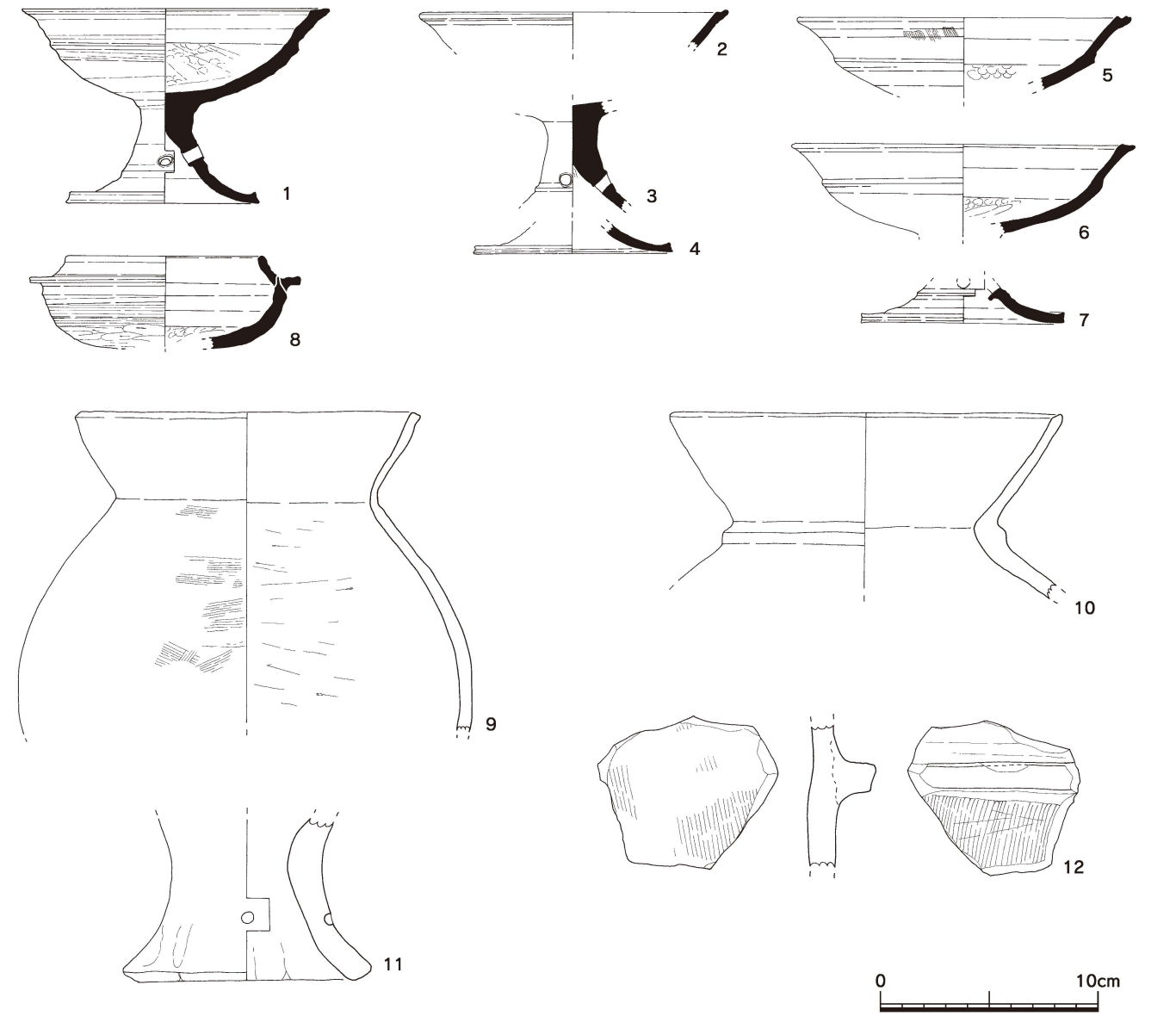


Fig.30 初期須恵器、古墳時代中期土師器、埴輪、弥生土器実測図 (包含層出土⑬ 1/3)

2. 瓦

Fig.31の1～5は丸瓦である。順にⅠ・Ⅱ・Ⅳ-4区Ⅰ層、Ⅴ区北西Ⅰ層、Ⅳ-2区Ⅰ層、SX014北側周辺 (R26)、Ⅴ区谷下層上位出土。いずれも凸面に斜格子目(菱形)タタキ。凹面に布目。4は長さ33.5cm、直径12cm前後。凹面側から切り込みを入れて分割している。

Fig.31の6・7、Fig.32は平瓦である。凸面に斜格子目(菱形)タタキ。凹面に布目。凹面側から切り込みを入れて分割している。6・7はSK025下層出土である。7は歪んでおり、格子目がやや粗い。32-1はSX012-⑩出土で、SK025下層とも接合。2はⅣ-3区Ⅰ層出土。3は熨斗瓦である。長さ30.8cm、幅10cm以上。SX012 ①～⑨周辺出土。4は不整な斜格子目タタキで女原笠掛瓦窯のM型式に類似する。Ⅴ-7区谷上層出土。5は粗い斜格子目タタキで、SX014付近Ⅰ層出土。6は端面に凹線があり、重圏文を志向したもののか。Ⅰ-2区Ⅰ層出土。7は赤焼きである。Ⅱ-3区Ⅰ層出土。

Fig.33・34は怡土城系平瓦である。一枚作りで、凸面に縄目タタキ、凹面に布目があり、側縁は面取り調整している。Fig.33はⅥ区包含層出土 (R200)。幅32.3cm、長さ30cm以上、厚み4.5cm前後。黄橙色で砂粒定量含む。端面のヘラ調整痕は重圏文風である。Fig.34-1はSK025下層とSK017上層 (R33) 出土が接合したもの。灰色を呈し、焼成は比較的良好。2はSP608、3はⅥ区北Ⅳ層、4はⅤ区谷下層、5はⅡ-2区南部Ⅰ層、6はⅠ・Ⅱ-1区中央Ⅲ層出土。灰色を呈し、焼成は比較的良好である。

3. 土製品

Fig.35は土師質の漁撈用錘で、主に網に使用されるものである。1～15は中膨みの管形である。1は長さ6.4cm、直径3.6cm、重さ69.31g、2は長さ6.9cm、直径2.9cm、重さ45.53g、3は長さ5.5cm以上、直径2.8cm、重さ28.24gで、いずれもⅠ区Ⅰ層出土。4は長さ5.5cm、直径2.3cm、重さ25.01g、Ⅱ区Ⅲ層、5は長さ8.5cm、直径1.7cm、重さ20.86g、Ⅳ区Ⅲ～Ⅳ層、6は長さ7.8cm、直径2.1cm、重さ31.85g、Ⅳ区Ⅲ～Ⅳ層、7は長さ7.0cm、直径2.0cm、重さ29.43g、Ⅴ区Ⅲ～Ⅳ層、8は長さ6.5cm、直径2.2cm、重さ22.4g、Ⅳ区Ⅲ～Ⅳ層、9は長さ7.1cm、直径2.1cm、重さ24.94g、Ⅱ区Ⅲ～Ⅳ層、10は長さ4.8cm、直径2.3cm、重さ20.2g、Ⅳ区Ⅰ層、11は長さ5.6cm、直径2.1cm、重さ16.28g、Ⅰ区Ⅰ層、12は長さ6.4cm、直径1.7cm、重さ12.31g、Ⅳ区谷Ⅴ層、13は長さ6.2cm、直径1.9cm、重さ24.21g、Ⅳ区谷Ⅴ層、14は長さ4cm以上、直径1.1cm、重さ4.19g、Ⅱ区Ⅰ層、15は長さ3.3cm、直径1.1cm、重さ4.23g、Ⅳ区出土である。16は略円錐形で、長さ2.3cm以上、直径1.5cm、重さ5.98g、Ⅱ区Ⅲ～Ⅳ層、17は球状直径1.2cm前後、重さ1.52g、Ⅴ区Ⅰ層出土。18は棒状で端部に紐孔をもつもので、長さ5.8cm、直径1.1cm、重さ10.57gである。

古墳時代後期～末の谷下層出土は12、13で、あまり中膨みが顕著でない細身の管状が古墳時代のものといえるかもしれないが、平安時代を主体とする上層出土が多い。

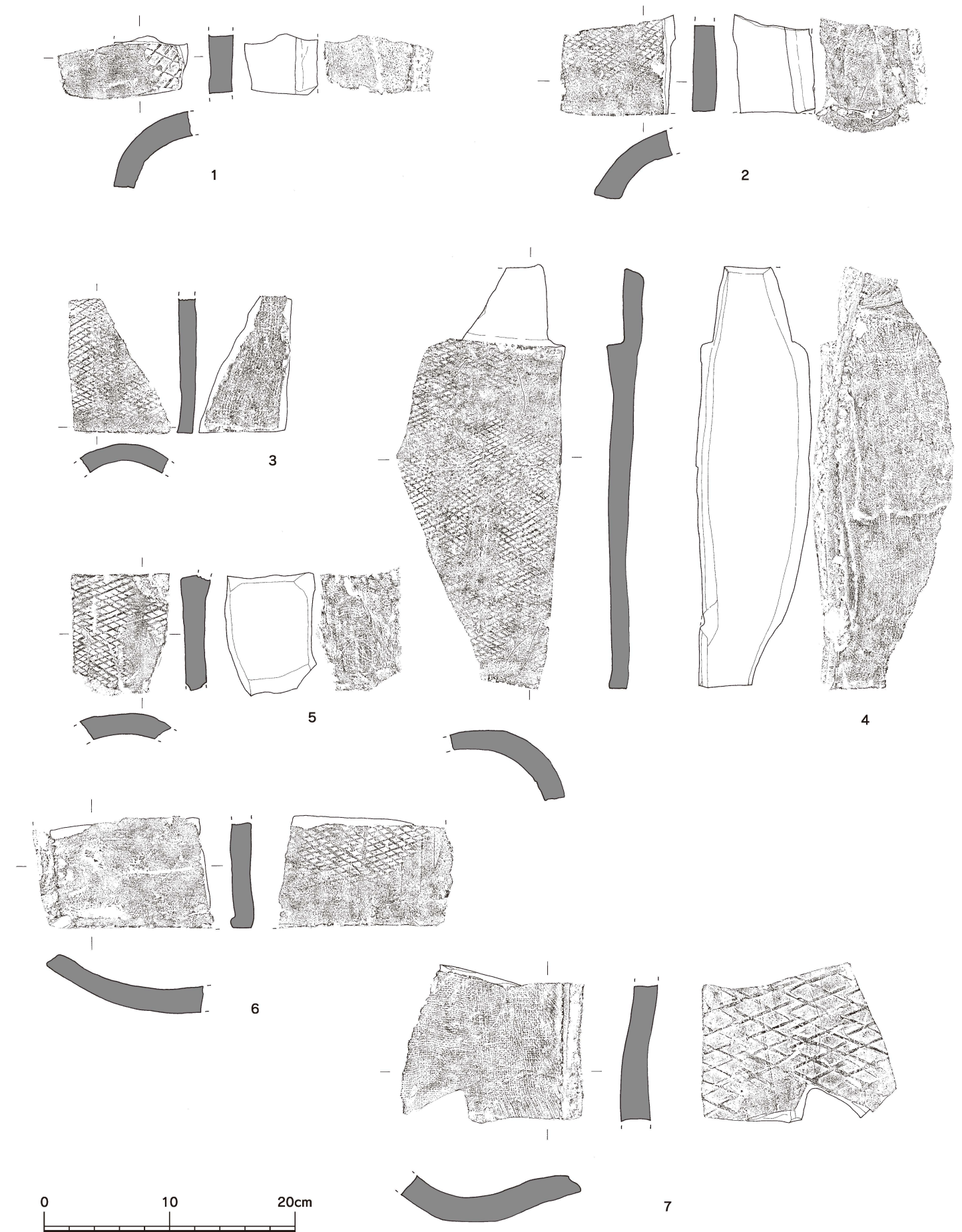


Fig.31 瓦実測図1 (1/4)

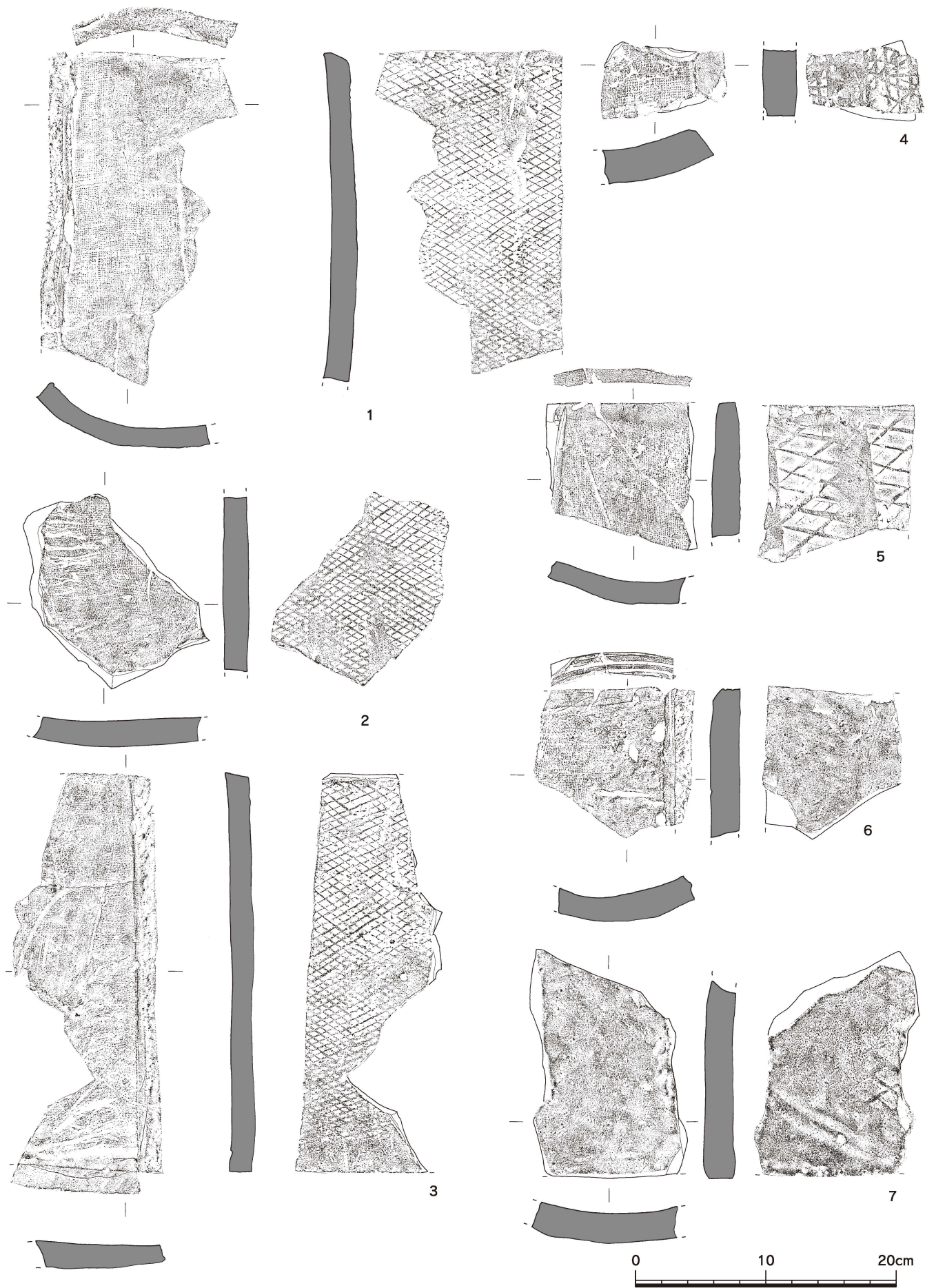


Fig.32 瓦実測图2 (1/4)



Fig.33 怡土城系瓦実測图1 (1/4)

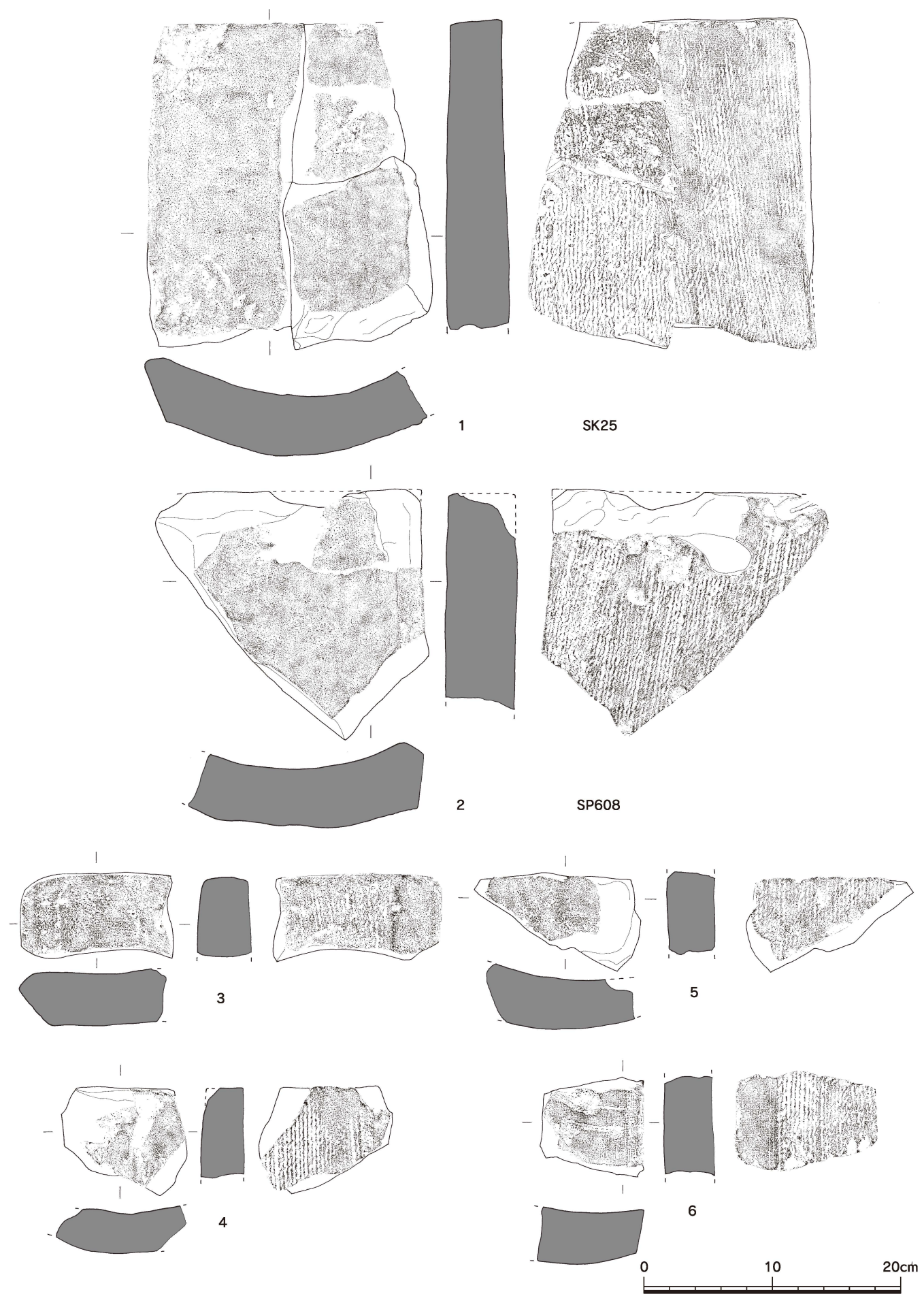


Fig.34 怡土城系瓦実測図2 (1/4)

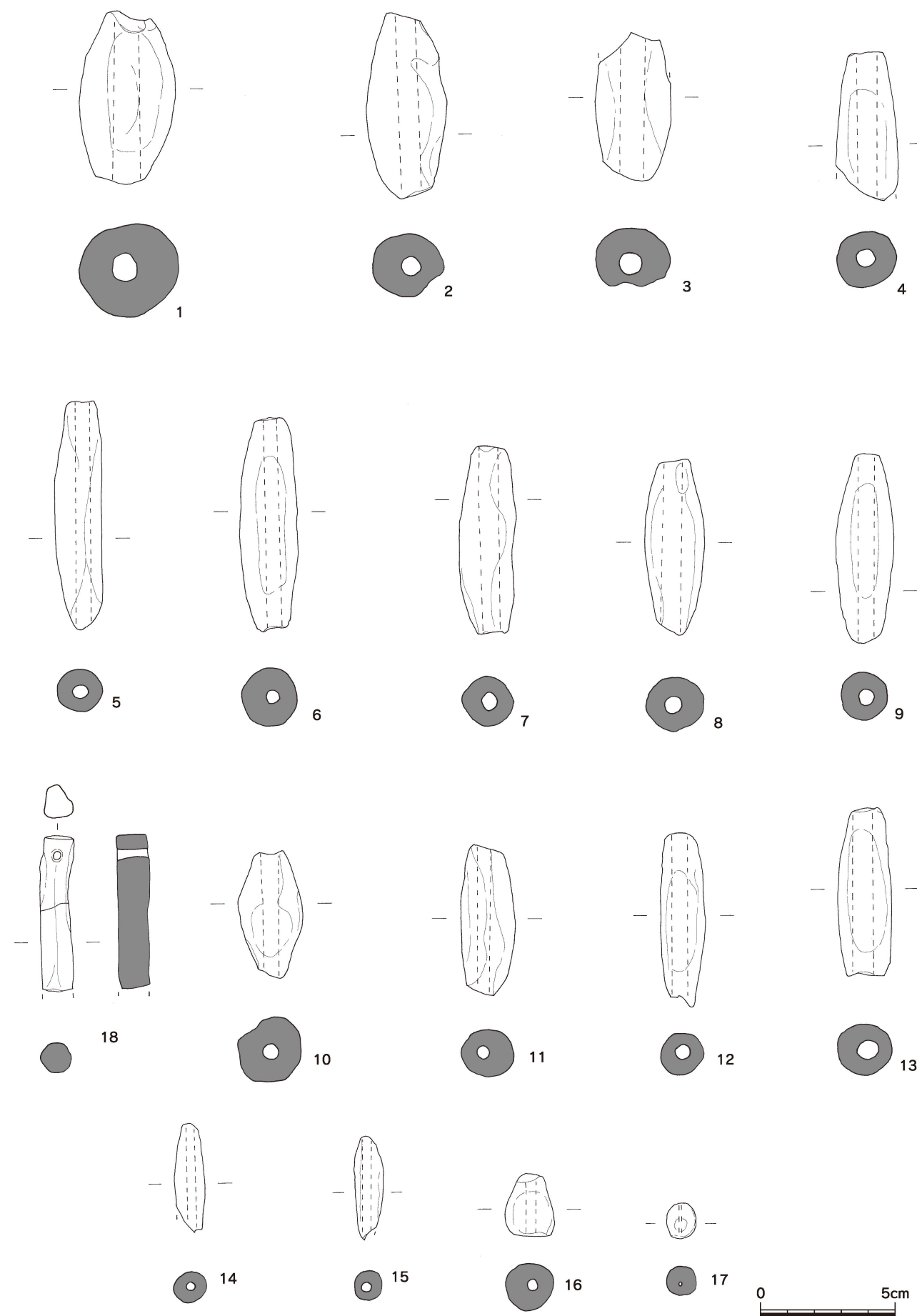


Fig.35 土錘実測図 (1/2)

4. 鍛冶関連遺物

①鉄滓等

Fig.36は平安時代の鍛冶炉に付随する廃滓坑から出土した鉄滓、鉄塊である。第IV章で科学分析の報告を行っている。分析の試供材番号との対応は、1の鉄塊系遺物がTOA5-9（以下㊟のように略称）、2の大型椀形滓が⑧、3の含鉄炉内滓が①、5の大型椀形滓が⑩、6の大型椀形滓が⑥、7の中型椀形滓が②、8の小型椀形滓が③に対応する。4はSK591出土の大型鍛冶滓で重さ1536.15gを測る。炉壁、鉄滓、羽口先端の溶融ガラス質化したものが複合している。

SK591はSL505に付随するもので、33Kg以上の鉄滓が出土しており、切られるSK590からも15Kg以上の鉄滓が出土している。分析によれば、含鉄炉内滓(製錬滓)、精錬鍛冶滓、高温沸し鍛接・鍛錬鍛冶滓、鍛打前半段階の粒状滓、後半段階の鍛造剥片を含み、SL505では小割鉄塊の成分調整程度の精錬鍛冶から鍛打加工の鍛冶までの一貫生産が考えられる。

SK5119はSL5118に付随するもので、13Kg以上の鉄滓が出土している。分析によれば、鋼素材の鉄塊系遺物、精錬鍛冶滓、鍛打後半段階の鍛造剥片などを含み、徐滓目的の精錬鍛冶から利器製作まで行われていたと考えられる。

SK606はSL604に付随するもので、21Kg以上の鉄滓が出土している。分析によれば、廃鉄器処理滓の大型椀形滓や極薄鍛造剥片などを含む。SK606を切るSK605からも5.5Kg以上の鉄滓が出土している。

鉄滓が1Kg以上出土している他の遺構も廃滓坑(場)であり、SK501から16Kg以上、SX541から3Kg、SK567から2Kg以上、SK593から2.7Kg以上、SK5121から3.7Kg以上、SK677から1.5Kg以上、SK679から1.1Kg以上、小型の鍛冶滓を中心に出土している。鍛造剥片を少量伴うが、粒状滓がごく微量しかないのは、前述の遺構とも同様の傾向である。これらはSL502、SL503など小型の炉や消失した炉に付随するものとみられる。

5次調査出土の鉄滓は包含層出土も含めて総量205Kg以上出土しており、平安時代を主体とするが、古墳時代末の遺構からも少量出土している。SK674下層から71.3g、SK5124・5125から193.47g、SL602(SI2)から33.07g、SL603(SI2)から31.85g、小型鍛冶滓が出土しており、SL602(竈)やSL603(炉)では微量の鍛造剥片も伴う。古墳時代末も小規模な鍛錬鍛冶が行われており、SL603はその炉であった可能性が高い。

②鞆の羽口、炉壁

Fig.37の1～8は鞆の土製羽口である。SK5119からまとめて出土しており、1～4がそれに当たる。5がSK501、6・7がSK593、8がVI区1面遺構面(R201)出土である。未図化の羽口は小53袋、コンテナケース(小)1箱程度の出土である。法量は直径8cm前後(1・2・4・6・7・8)と直径7cm弱(3・5)に分かれる。胎土はいずれも類似しており、1～5mmの石英・長石粒を多く含む。先の3～5cm前後はガラス質化し、先端が黒化する。先から10cm前後までは炉壁内に挿入されていた範囲とみられ、還元傾向の色調となっている。この境界線から送風管の挿入角度を推定することができるが、遺存の良い1や4から16～19度前後とみられ、比較的寝ている。

9はSK591出土のスサ入り焼粘土で炉壁である。方形の通風孔が2箇所みられる。

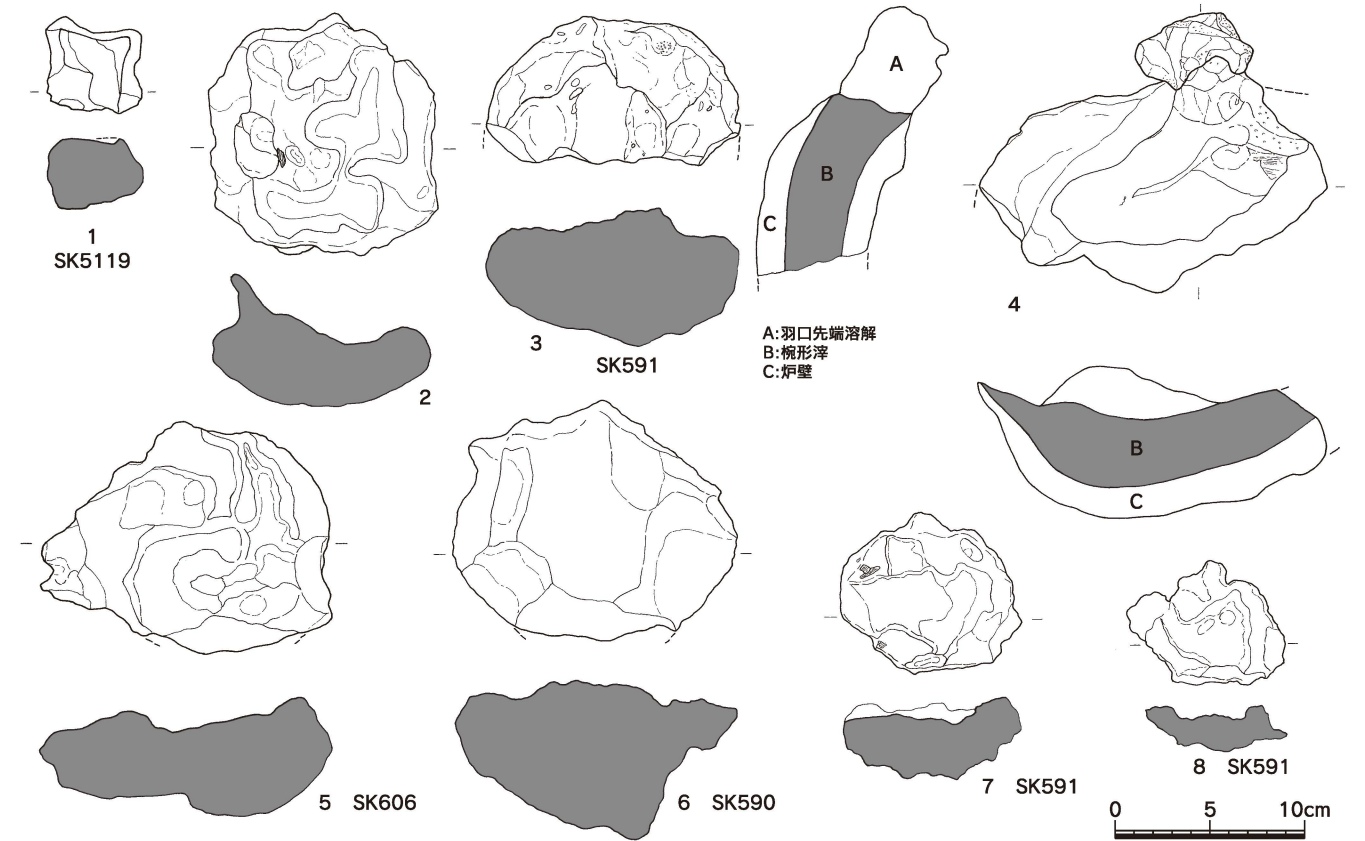


Fig.36 鉄滓実測図(1/4)

5. 金属(鉄・青銅、鉛)製品

Fig.38の1～14は鉄製品である。1は完形のU字形鋤先でSK674すぐ南の遺構面より出土(R206)。古墳時代末とみられる。長15.7cm、幅16.4cmを測る。2は鎌2点が重ね合わさったもので、先端側を欠く。V区中央西部、第1面下の暗褐色土出土。古墳時代か。3は刀子である。先端を欠くが、把や鞘が遺存する。古墳時代末のSK683出土。4は直刀の先端付近でI-4区第1面出土(R3)。平安時代か。5は刀等の破片とみられる。II-3区IV層出土。6は板状で、VI区北I層出土。7は断面台形の細板状で、V-6区谷I層出土。8は細板状で、古墳時代末のSK678出土。9は先端が尖る細板状で、II-4区谷V層出土、古墳時代か。10は鋸状のものと薄い細板状のものが錯着したものである。I-2区谷V層出土、古墳時代か。11は釘で先端を欠く。平安時代のSB1(SP430)出土。12は釘とみられるが、両端部を欠き変形している。VI区中央I層出土。平安時代か。13は鉄素材とみられるもので、表面にスが多い。I-1区西II層出土、平安時代か。14は鉄針で、平安時代のSB2(SP38)出土。

15は鉛錘で、II-2区I層出土、平安時代である。16は青銅製小型金具で、紐通しとみられる孔

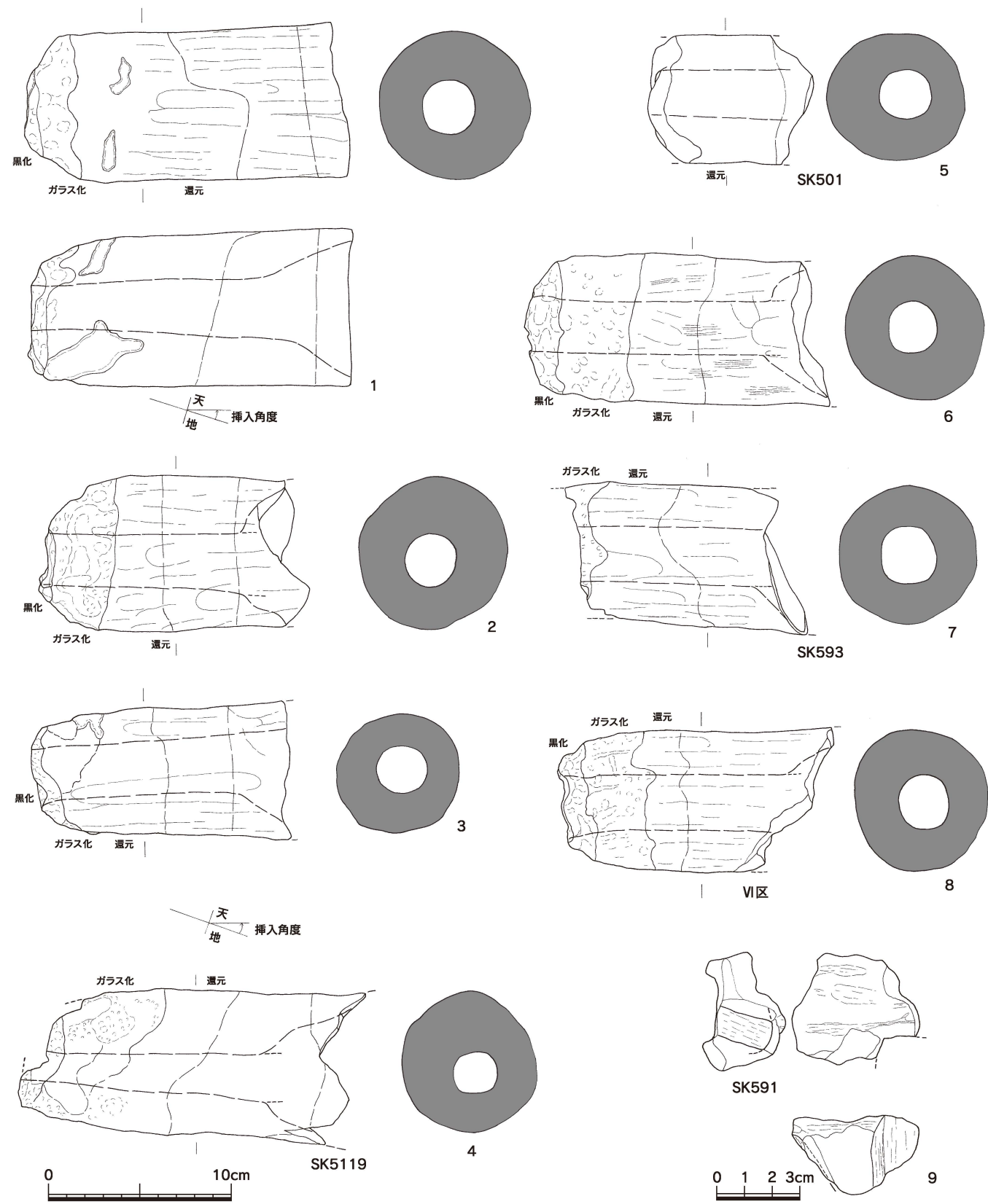


Fig.37 鞆の羽口、炉壁実測図 (1/3、1/2)

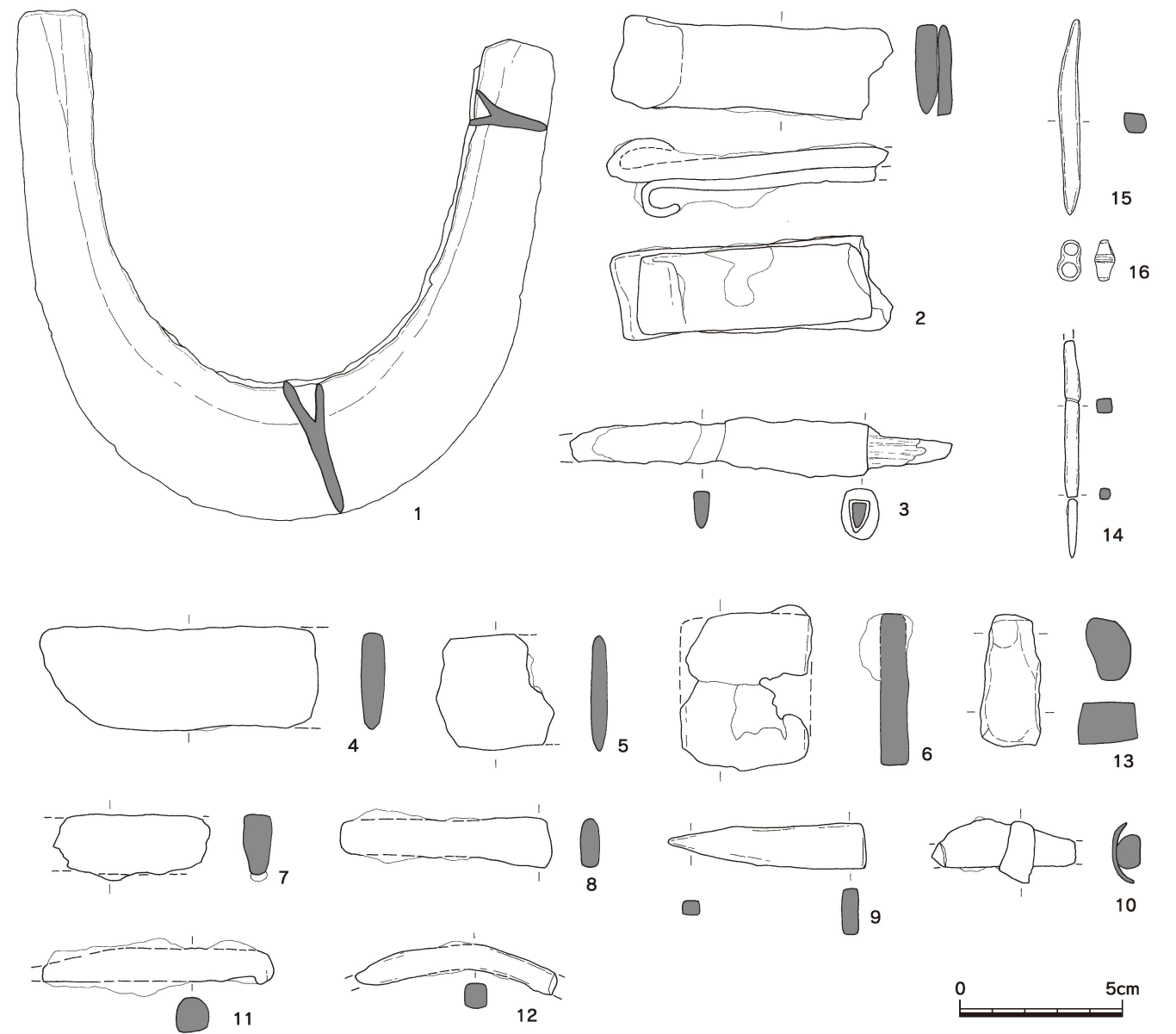


Fig.38 金属製品（鉄器、鉛錘、青銅製金具）実測図 (1/2)

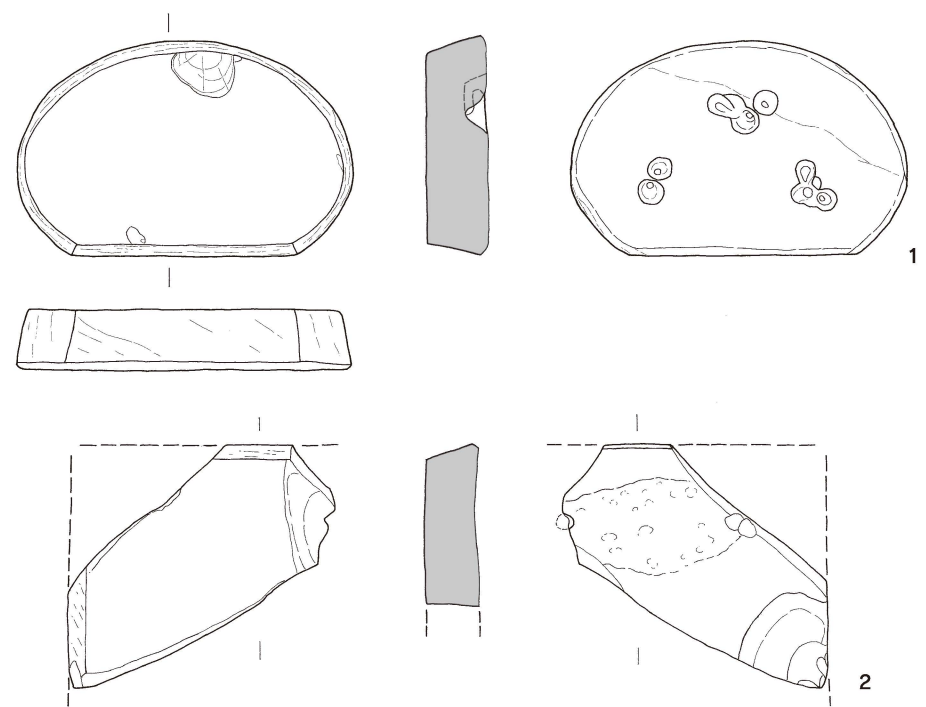


Fig.39 石製品（銚帶具、紡錘車）実測図（1/1）

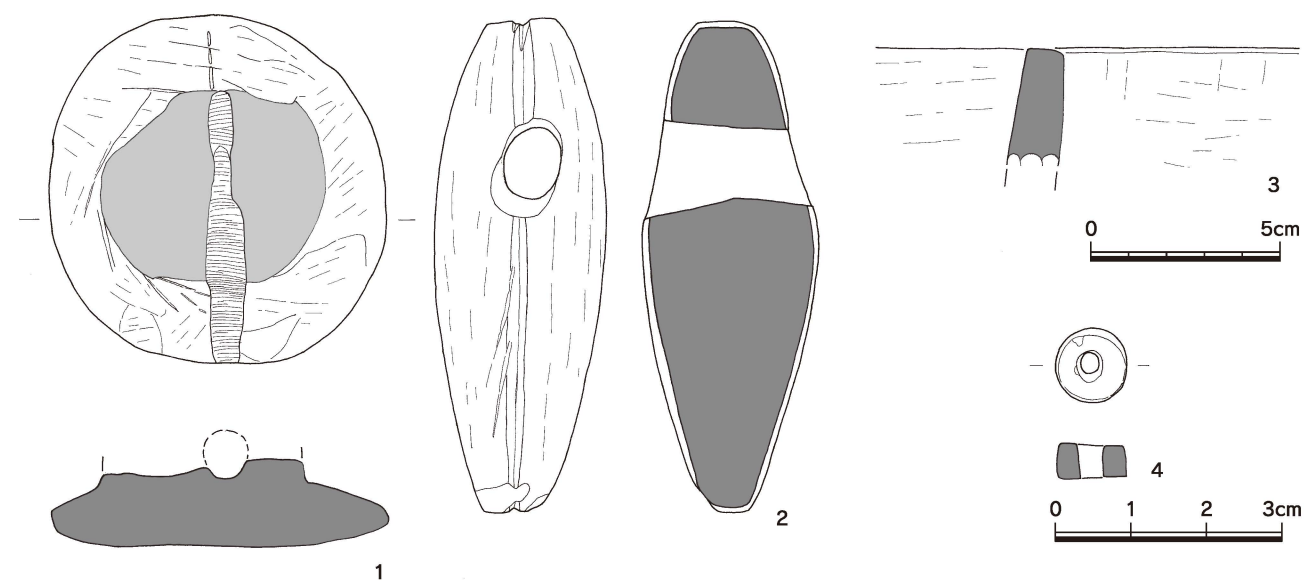
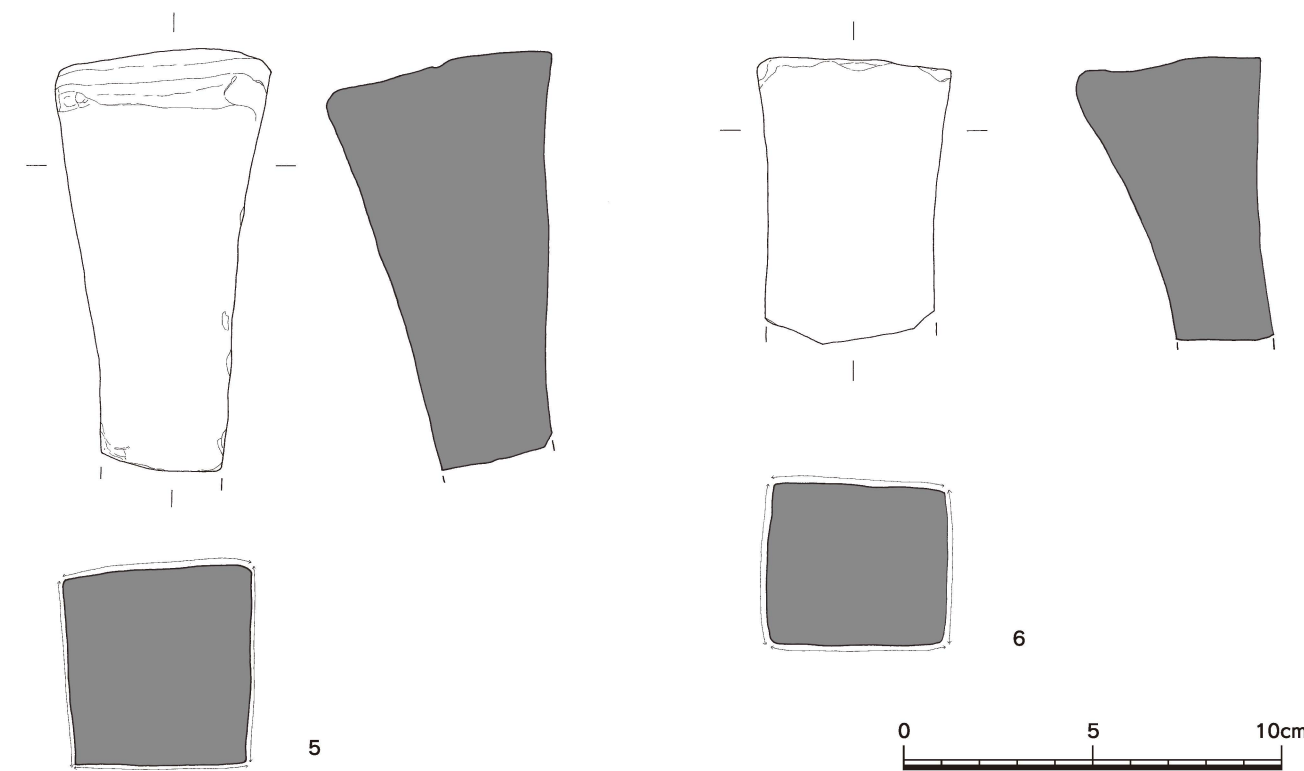
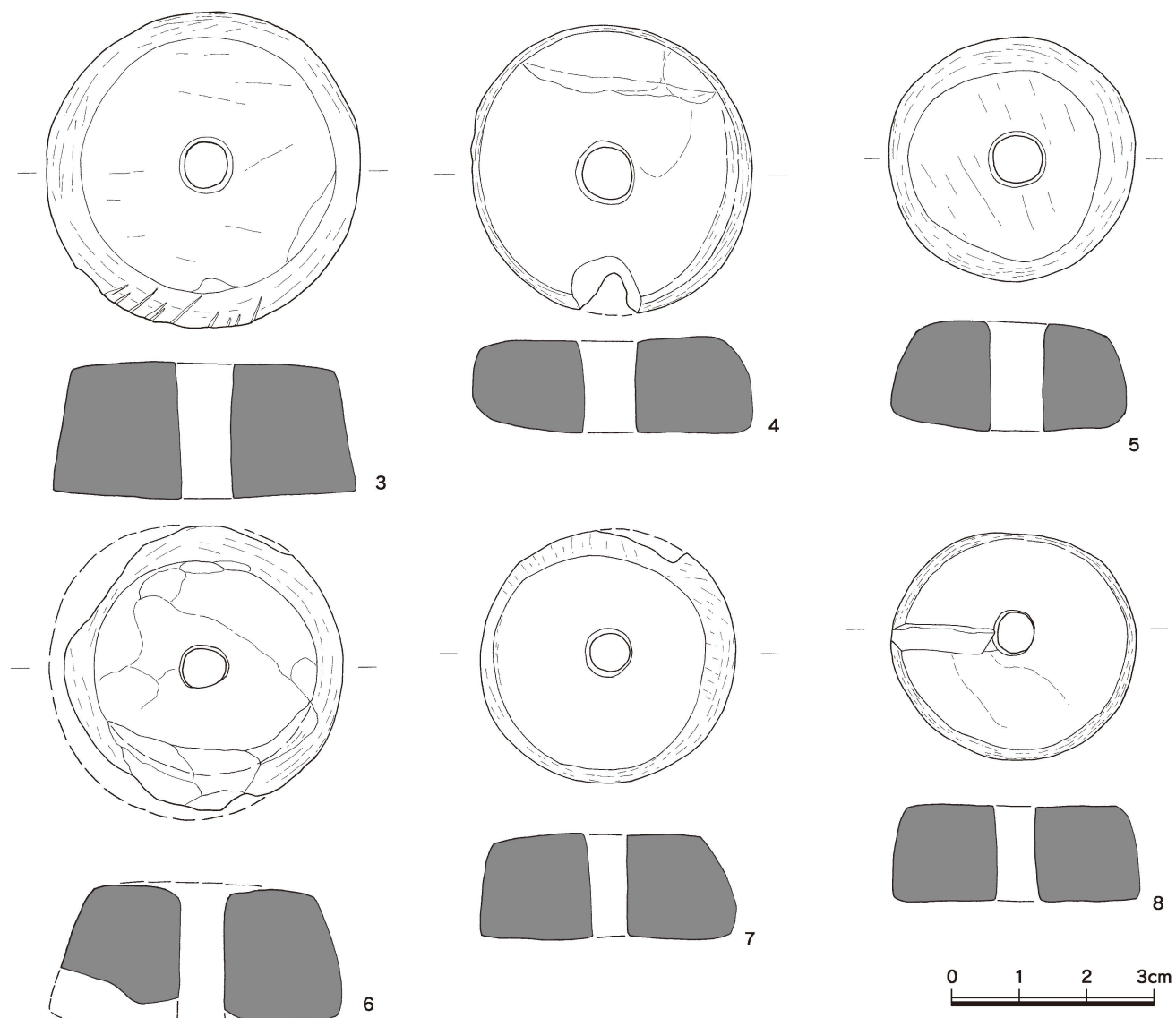
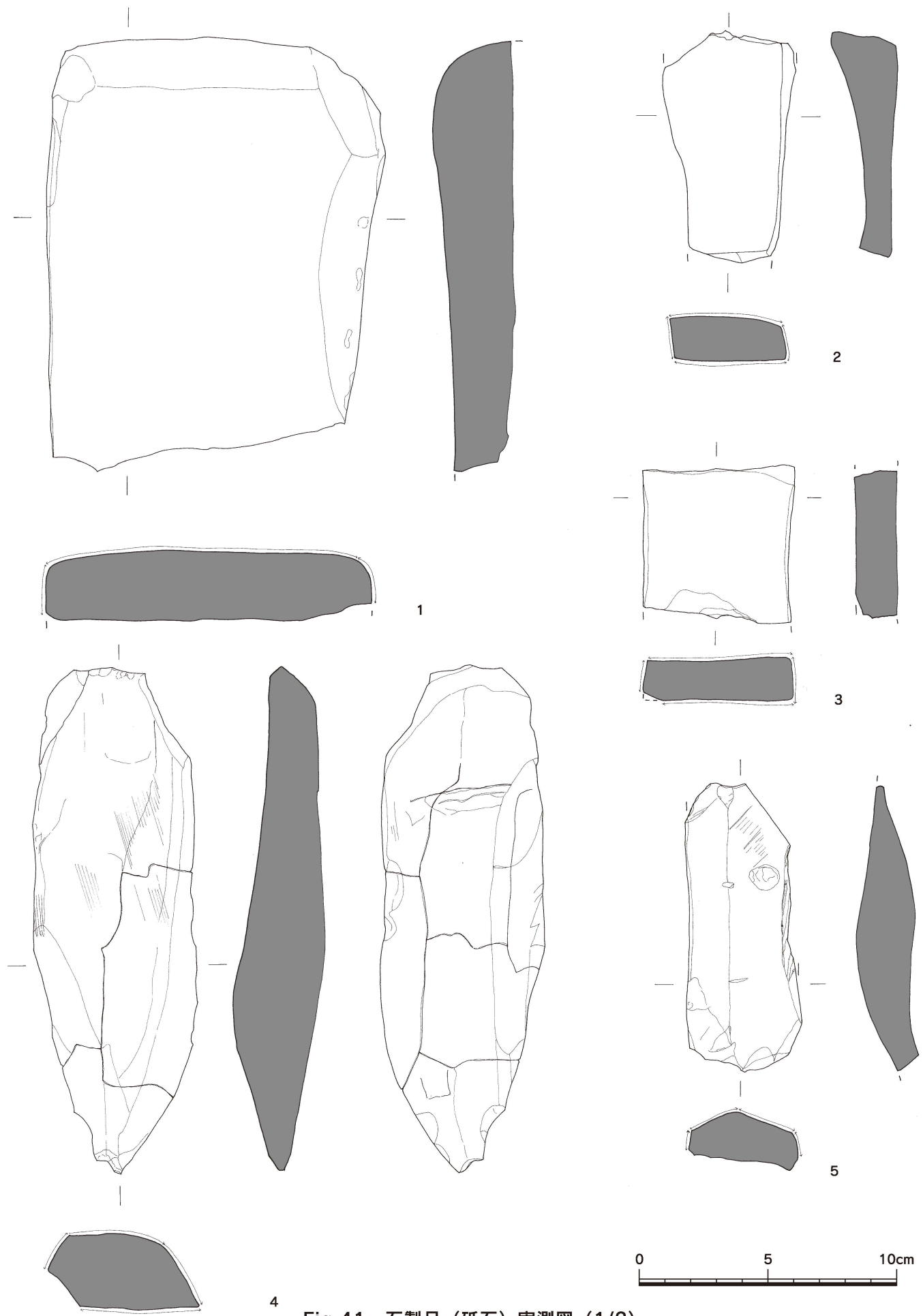


Fig.40 石製品（鍋、錘、玉、砥石）実測図（1/1、1/2）





4 Fig.41 石製品（砥石）実測図（1/2）

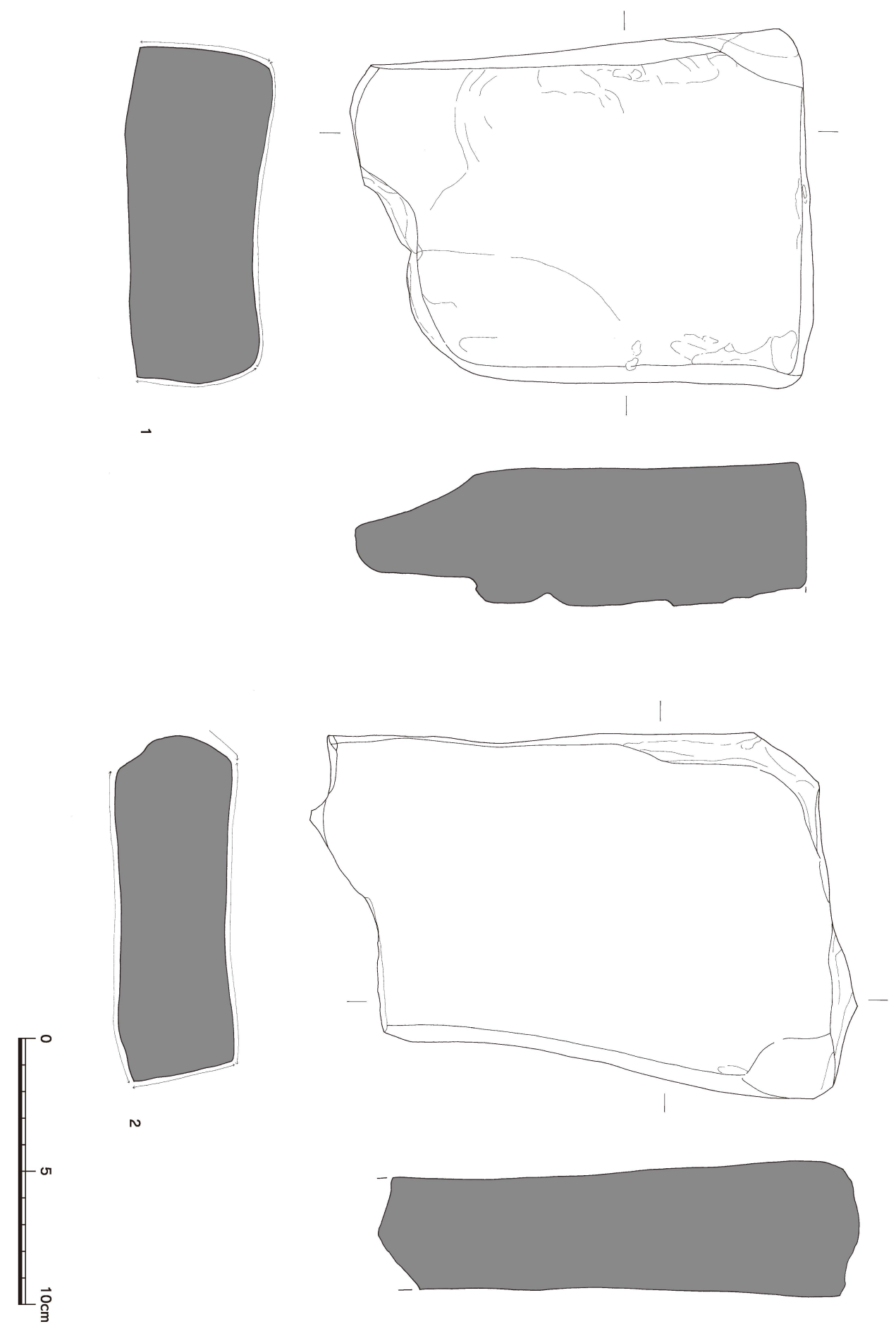


Fig.42 石製品（砥石）実測図（1/2）